



アラン

ールマンディー人の
プロポV(完)
【2014年11月号】

翻訳：高村昌憲

私はジャンヌ・ダルクのために、決して大喜びして旗で飾ったりしませんでした。私たちにやらせようとするこのお祭りには、嘘が多すぎます。あるいは多くの混乱が必要なのかどうかです。それは既に〈ヒロイン〉の色彩をつけ加えているローマ教皇のものが、少し強すぎる色彩で飾られているからです。勿論、それはジャンヌ・ダルクを戦争の天才と理解すること以上に間違っています。反対に平和の天才です。平和主義者たちは、決して神々を裏切った儘にしているはいけません。

この女性戦士は、決して武器を取りませんでしたし、血も流しません。彼女は正義を望み、そしてイギリス軍は去りました。しかし彼女は憎むことが出来ませんでした。それ以上の気持ちはありませんでした。又、如何なる強い思想も深い理念も嘗て、これ程〈力〉と〈正義〉が根源的に共通して明るみに出たことはありませんでした。〈心〉と同じ言葉が愛と勇気を同時に表したい時、大衆の本能と言葉の職人が同一の思想理論を明らかにします。体面を保つことは、これ自体及びそれに関連して平和であることです。その純潔さと旗が、そのことを傲然と示しています。しかし彼女を理解するには、彼女を良く崇めなければなりません。このお祭りには、私はもう一度言いますが、何時も不正と結びついた怒りが曖昧な顔で彷徨き回っていると考える時、まさしくその冒瀆を私は非難します。しかし、もっと良く説明することです。正しい力で困難なこの思想を正確に境界線を引いて、もっと良く限定することです。感動的でなく、恐らく完全でないとはいえ、何であつてもヘラクレスの美しい神話が、同じように役に立つことはあり得ます。というのもヘラクレスは怒ることもなく戦つたとは言えませんし、人は何時もその瞬間に突然起こる怒りなくして十分に強く戦えるとも言えないからです。ジャンヌ・ダルクにとって最も美しいものは、彼女が人々に対して剣を預けて、本当の武器は断言し主張することにあつたのです。多分、私たちは望むだけで十分な時代に辿り着くことになります。そして、もしそれが今でもユートピアなら、ジャンヌ・ダルクの時代でも賞讃されなければならない高貴な思想です。

私は更に考えます。この伝説には深遠さがあります。その美しき良き時代に賞讃されたことを、もし国民がこのお祭りに入れたなら、それは戦争の戦い方というよりも寧ろ戦争への信仰です。というのも今日も動員したり一カ所に集める技術のように、その時代にも操作したり閉じ込める技術があつたからです。そして、その時代の職業軍人は、今日に似ています。しかし結局のところ、何時も目標に直進する純真さが、何時かは最も強くなつたのです。それはイギリス人を国外へ追いやつた一人の羊飼いの娘です。奇跡であると良く言われました。沢山の職人たちが將軍たちに厳しく叱りたがって更に強くなつたことは、信じ難いことです。それにも拘わらず駄目なのは、それが原因でもあります。それも信じ難いことです。私たちは、不当に攻撃された国民によるこの思想を敢えて養成しませんし、防衛に立ち上がるための道具を置き忘れて、無駄な知識よりも権利をもっと強く主張し、知ることさえも決して望みません。超人の思想か殆どそれに近いものです。しかし、それではジャンヌの勝利は何を意味するのでしょうか。私たちの歴史の中で、神の恩寵によって受け入れたこの完璧な神話は、何を言いたいのでしょうか。そして不本

意ながら勝利したブルジョアたちの王にとって、何時も同じことを行い、何時も自分の喜びのために、何時も他の人々が良い結果になると悪口を言ったり考えたりするエリートを除いて、この勇敢な羊飼いの娘の傍には何があるのでしょうか。私たちのためにはもう一度、大いに強くなって思考することです。私たちは、人が戦うのを覚えるのは働いている時であると敢えて信じようとしません。人々がダンスをしている間に本当の戦士になるのは、農耕や鍛冶屋に専心する時であるとも敢えて信じようとしません。将来は分かる真実ですが、死刑執行人なら決して火炙りにしませんでした。

(一九一四年五月二六日)

大声で読むことは、時々美しい音楽のように快い気持ちになります。しかし、それは稀有なことです。読まれる本が大変に調和がとれていなければなりません。読者の感情や尋常でない喉は、敢えて言うなら、踊りのように読者に統制されているように傲然として調和がとれていなければなりません。従って詩句に起こることを観察してみてください。上手な朗詠者は殆ど意味を忘れ、そのリズムに聞き入ります。それは厳格な規則を守り、イマージュを落ち着かせ、知性を働かせるのと同じ働きです。心は最早、自由な精神を表している働きしかありません。以上の理由から、春はより美しくなります。愛も同じです。それは詩人がそれらを制圧した時なのです。さもなくば草の中で転げ回ったり、犬のように騒ぐしかありません。強い情動は、大変に強ければ本当に幸せになれる。正確な言葉で言うなら、大変に恥ずかしいことです。何故なら人間はここで自分に克って、自分を組み立てて、書かなければならないからです。神々が私たちに結びつく必要はありません。

私は不思議な感情をこれらの理性によって説明しますが、学者ぶる人々が言うように、表情豊かに上手に読もうとする人が読むのを聞くと、はっきりと言いますが、私は顔が赤くなります。取分け、全く簡潔な散文とか権威ぶらない詩に関する時はそうです。というのも朗読の感情はその時、大変に不安定であるからです。行き当たりばったりです。間違った抑揚を聞くと、何時も私はそれを感じます。私はそれを見分けますし、それを恐れます。その人が読む前に持っていた小さな心配は、強烈な情動の中で、その言いなりになるのを非常に小さくしようと試みる時、私が感じるのは彼が読んでいる今です。この羞恥心は子供の心に共通しており、特に情動が率直で強い時は、学校が是非とも助けなければならない人間性という美しい宝物の一部を成しています。それ故に、子供が既に喜劇役者のように恥知らずになっているこの朗読が、私は好きになれません。

この種の失敗に陥ることなく、私は人々が何時もテキストを支配し、目標として朗読を拒絶し、素早い一瞥で判断して欲しいと思います。先ずは流れるように明瞭で迅速な朗読を行うことです。両眼で読んで行くもので、何時も大袈裟な感情を表す喉の体操は要りません。というのも精神は、その様にして観念の独裁から自由になるからです。明確にすることなく思考することは出来ない、と既に思っている人は沢山おられます。従って彼らは、どんな怪しい思想も拒絶します。少なくともそれを形づくるなら、既に信じているものになると彼らは感じています。ところで、内面的に大袈裟に演説したり叫んで思考したりする習慣は、思考を重苦しくしますし、賛成するにしろ反対するにしろ、狂信家たちを生み出します。精神は、認めることがなくても理解出来ることが良くあります。思考とは、先ず代数の一行でしかなく、白の上の黒です。そして読むことの方法は、本当の文化の印です。情動の感情は判断力の後にしか来ません。その時には、門を開けるのが朗読にとって良いと人は考えるでしょう。

(一九一四年五月三十日)

民主主義の〈権力〉は選挙の票によって選ばれると言われるなら、余りに単純です。権力を持った〈社会〉は、植物や動物のように自然に生まれるものであることが忘れられています。「ヒースは何時も荒野にあったように、人間は何時も社会にいさせられた」と或る哲学者は言いました。一人ひとりの社会は、与えられたようなものです。その構造は人間の性質に依存しており、先ずは生物学的法則によって人は食べて、身を守り、眠り、子供を産み、物を作り、望んで、愛して、憎んで、怒ります。従ってその結果、地表と地層、泉、川と海、風、雨と四季があります。一人ひとりの社会には、それぞれの大きさや力と体質と気分があります。

同様に一人ひとりが、自分の方法や情熱や勇氣に従って、自分の場所を見付けます。一人は高利貸し、もう一人は弁護士、もう一人は会計係です。一方は命令し、他方は従います。この集団は、一人ひとりが公的事柄を考えることを全て前提としていません。反対にその力の配置は、一人ひとりが食物や友人や安全や愛や喜びや栄光を求めている間に作られます。組織は全てが必要性によってそれらの事柄を斟酌しますし、絶対君主も同じです。コルベールは、ジャン・バル（1）、ジャカール（2）、ビュフォン（3）、パストゥール、ベルトロ（4）のように自然の産物です。総選挙が全てを作ると主張すること、そして地理学や歴史の瞬間に応える世論や集団や協定によって、それは要求し過ぎです。重力の法則は声に変えられませんが、少なくとも梃子や傾斜地や滑車や斜面や巻揚げ機が発明され、結局のところ重力に克つ方策がその中で行われます。

その人が生まれてその中で参加することを見出す社会構造を拒絶したり否定するのには、決して理屈はありません。彼を全くの無敵と思うにも最早決して理屈はありません。何時も力があるのです。私は、お金持ちや陰謀家や野心家たちの声を聞きます。この方法を、もしも眼を閉じて受け入れたなら、それは直ぐに今まで何度も見て来たように、暴君を抑制させるようになります。そして、現代ではこれらの自然の力が絶えず改良されているのが分かりますが、物質的力によるのではなく、社会的力によるのであって、それらが世論になります。信用、権威、尊厳は世論次第です。そして世論も又、世論次第です。ここでの自然の法則である盲信に対して、人間は世論という自由な流通や伝播を創り出しました。総選挙が象徴的に代表することになります。というのも世論であると信じるものを、何時も一人ひとりが模範にし過ぎるので、隣人の意見を認める前に、秘密裏にこっそりと自分のための意見を言うことが有益になります。そして共通の意見というこれらの閃光は、共通の盲信に反対して見出した唯一の薬です。選挙とは、それ故に権力の濫用に直接的に反対するものです。例えば兵役三年法は、権力の巧妙さや更に全くの本能的な巧妙さから中央と結びついた情熱や利益のメカニズムを生み出し、共通の想像力の中で殆ど全ての者によって望まれ受け入れたものとして生まれました。突然に公的になる私的で秘密の意見は、決してそれを追認しないでも十分です。従って〈権力者たち〉は、別なやり方で組織化します。というのも彼らは、意見で生きているからです。そして比例代表制が、世論に合わせて私的で秘密の意見を統制したがつていることに注意して下さい。そしてそれが、今では〈権力者たち〉の最高の武器なのです。

(一九一四年五月三十一日)

- (1) ジャン・バール (一六五〇～一七〇二) は、フランス海軍の船長で、オランダや英国の船を襲って、勇名を馳せた。
- (2) ジョセフ・マリ・ジャカール (一七五二～一八三四) は、ジャカール織機を発明したフランス人。
- (3) ビュフォン (一七〇七～八八) は、全三六巻の『博物誌』を刊行したフランスの博物学者で作家。
- (4) マルスラン・ベルトロ (一八二七～一九〇七) は、フランスの化学者で政治家。文相・外相を歴任した。

ロシア皇帝の鞭がぱちんと鳴ったなら、議会は無礼な行為のために反撃するかもしれません。露仏同盟は必要であったと認めましょう。もしもそれが支配者を待ち望むエリートによるものであったなら、愛されることはないでしょう。私は昨日、ロシア監獄に関する小冊子を手に入れました。それを読むのは容易でなく、取分けこの野蛮な権力者が私たちにすぎり、そして私たちも彼の野蛮さにすぎっていると言うようになるかどうかです。この感情は、外的必然性を考えながら自由にさせることが出来ます。しかし、どんな共和主義者もそれを試します。人権擁護連盟の抗議にも拘わらず、フランス国籍のユダヤ人たちが右派に依拠して、ロシアを対象としなかったことを知るのはいいことです。

露仏同盟は、一般受けするようには見えませんでした。特に初期の頃はそうでした。しかし、それが言いたいことを人は知ります。それはパリの人々が大いに叫んでいたことです。勿論、反動的なエリートが集まっているのを別にすれば、パリでは何時でも何でも構わずに叫ぶ人々は多くおります。美しい夫人たちは殆どがロシアの首に抱きつき、闘牛士のようにレースや宝石にのめり込んでいる、と人は私に言いました。贅沢を身に付けている女性は、不公平に対して本能的な狂喜を持っています。彼女は、経済学者たちが何時も十分に理解していないことを大変生き生きと感受していますが、それは女性の贅沢が実際の不公平を本質にしているということです。結局のところ、彼女たちは強い権力や不公平な権力に喝采します。国民は一瞬で従うことが出来ました。しかし熱狂というものは、国民に対して直ぐにひっくり返るのを十分に分かっています。冷ややかな顔をして終わって仕舞います。熱狂的なストライキのように、直ぐに〈民主主義〉が決定され明確になります。

それ故に露仏同盟の理屈は極めて冷静です。双方の譲歩が望まれています。ロシアの重要人物は決して総選挙、省庁の責任、支出の抑制、悪弊の改革を真剣に行わないのを、私は良く理解しています。これらのことは、彼にとっては言葉だけのことです。彼は別の名前の王や王子を探します。彼らを見付けて敬います。もし彼が国民から、実際に兵役の期間について意見を求められていると思ったなら、大笑いしました。我が国の政治家たちは、ロシアのこの精神の感染に抵抗しなければなりません。さもないと、ロシアの精神はフランスの制度には少しやり過ぎです。三年の兵役はロシアには嬉しいし、まさに自然な流れですが、我が国の審議を変えるものは何もないに違いありません。彼らは、彼らの精神で組織されています。我が国は、我が国の精神で組織されます。何故、議会在非常に礼儀正しい動議を採択しなかったのか、私には分かりません。そこでの外国権力の介入には何でも反対するのは、我々の家庭内で友人とか親戚とも介入に反対するのと同じであるからです。私たちは自由フランスで、自由に生きることを考えなければならないと何度も繰り返し言われています。そこには、これらの美しい原則の言葉を適用する機会があります。暴君と結びつくことは、最早敵になることでしかありません。そして雄鹿に復讐するために、轡と鞍を付けさせた馬の寓話を思い出す必要があるのでしょうか。より公正な協定にしなければなりません。ペテルブルグは、我が国の二年兵役の兵と予備軍の武装を前提としなければ

なりません。私たちは、兵が入るロシアの監獄をまさに前提にしているのです。

(一九一四年六月一日)

民主主義制度において国民が権力を持つなんて、それは厳密な話ではありません。静かにゆっくりと考えることです。幻滅が次々に起こります。というのも事実として、国民はせいぜい既存の権力の上での制御機能を行行使するのは大変に明白であるからです。

オーギュスト・コントは、その点について注意深く偏見もなく熟考しました。自然の真理が正面から見られることを望みます。そのことは一人ひとりの個人が本来の力を管理することです。或る人は狩猟とか戦争を指揮するのが上手い人です。彼を政府に入れることが本来の力です。別の人には、計画を立てて計算し、貯えることを覚えます。労働や産業が重要になればなる程、彼も本来の力で統治します。別の人には、人々を裁くことを覚えます。彼らを納得させたり、見抜いたり、分割させたり、騙すことを覚えます。それも一つの力であり、管理者とか警官としての能力を明確にします。或る人間は、戯曲を書くのを覚えます。彼はそのことによって支配します。そして人があらゆる権力を行行使せずに、出来る限り遠くへ広げないのは非常に珍しいことです。その点については考えないで下さい。

集団の力は何時でも個人の如何なる力よりも勝る、と言われて来ています。そうです、熱狂した大衆が行うのを見るように、壊すこと、殺すことに如何なる技術もありません。しかし、何かを行うことが問題になると、権力が発揮されます。そして権力を発揮させてばかりいるからでなく、不当に獲得させてばかりいるからでもなく、権力であるから上手く行くのです。もしも私が一番正確に計算したなら、計算は自由に出来ます。もしも私が一番上手に組織したなら、自由に産業を作れます。そして不平等を行うことは、権力者によるお決まりの行為を表しています。

オーギュスト・コントはこの状態を男性的に受け入れて、この地球上の私たちの生活にあって一般的状態であると同時に、完璧に調和していることを望みます。至る所で上級は下級を前提にしている、と彼は言います。思考するのは私たちです。私たちは太陽や風や石に支配されていますが、それらは決して思考しません。私たちは先ず外部の秩序に従わなければなりませんけれども、それらには如何なる誇りもありません。私たちはそれを変えるために、従っているのです。何故、彼は自然の出来事である社会条件を別のものにするのでしょうか。彼は言います、「既存の秩序しか人は変えない」。要するに彼が見る処では、思想の役割は秩序を変えるものであって、秩序を創造するものではないのです。

私は近頃になって、民衆の要求が如何なる方法で権力を変えているのかを理解した時に、それらの関係を想像しました。何故なら、その要求は権力を作らないからです。民衆の投票は、理工科学校生の成績を変えることは出来ません。その様な人は、その人の本来の能力で視察官になって、次に校長になるのであると私は理解しています。そして国民が口を出すことではありません。私は大変に誇張して言っています。もしその競争が間違っていて、もしそれらの試験が先ず或る人たちに精通していたなら、国民は口を出します。しかし、それは倫理的秩序の見地からのものであり、少なくとも無秩序が示された時に行動するのであり、実際の権力は抜け出て最良の選抜が行われ、それ故に凄惨なものになっています。そして濫用せずにはられません。という

のも人間が情熱を持たないことはあり得ませんし、権力を濫用しないことも決してあり得ません。まさに合法になるからです。結局のところ、何処に国民の権力があるのでしょうか。あのオーギュスト・コントによれば、少なくとも懲戒においてあるのです。それは大したことではないと言ったり笑ったりする必要は決してありません。というのも、何でも構わずに暴君は崇められたいからです。そして暴君は情熱を持てば持つ程、本物になりますが、その権力を私たちが崇めないことを覚えたならば、それが一番良いのです。

(一九一四年六月十日)

快活で明瞭で自由な精神を持っている友人が、昨日私に言いました、「他人のための仕事によってしか豊かになれないとあなたが言う時、あなたが豊かさについて書いても、私は決して賛成しません。何故なら科学と組織が、創意と正しい秩序での機械とか規律とかによって、仕事の生産を多く伸ばすことが出来るからです。そしてこれらの技術者たちが人に損害を与えることなく、追加された生産の全てとか一部を上手く採取出来るのです。というのも、その労働は増えないからです。そしてそれは、労働の全てとか殆どが痛みを与え、人間の力が英知もなく使用され、一般に鎚を打つのに一回で十分のところを未だ三回も打っていた、未開の時代で良く起きます。あなたの論理は、もしも労働が最小の苦痛で最大の生産を手に入れることを成し遂げるまでになるのを前提にするなら、確かに重要になります。しかし、私たちはそこから大変に遠い処にいます。創意工夫に富んだ人々が、他人の重荷を少しは取り除きながら自分自身を豊かにするのは未だ可能ですが、長い時間がかかります」。

私を拒む者を私は愛しますし、私は私自身も良く拒みます。これらの率直な言葉は、沢山ある真実の観念を循環論の中に巻き込む対象では全然ありません。私は、真実の観念が一つでしかないとは思いません。私にとって観念とは、人が期待して直ぐに完全なものに立て直すのを望む一つの主張です。他の言葉で言うなら、一つの思想です。そして、私は何も促さないで何も目覚めさせない、つまらないありふれた考えを殆ど至る所で読んだとしても、決して書いたりしません。もしも私の全ての観念が、私の望むようなものであったなら、それらは布石です。そして少なくとも承諾と否定の機会を探す人々は、私のものを決して読まないで見倣す権利が私にはあります。

大変にはっきりした観念ですが、不完全であるのが明らかな観念に従えば、私は次のように発明者や組織のまとめ役に言います。「あなたが自分のために言うこの過剰生産物を大変敏捷に手に入れるのは、誰のためでもありません。そして、もしもあなたが熟考して百日分の労働をしないうで済んだなら、一人分ではなくて五十日分の給料を手に入れることが出来るとあなたは信じます。しかし、それにも拘わらずあなたは起きて寝るまで何時も一日分の労働しか齎しません。あなたが何を生産しようと、その後で私は見積り評価しなければなりません。というのも僅かな労働しか求めないものは、それと同じようにその価値も僅かであるからです。もしも錬金術師が一日に百グラムの金を製造したなら、直ぐに価格を下げます。かくして、もしも公正な価格によって、同等の価値による交換を行いたいのなら、一人分を養う以上に一日分の労働が生産することは決してあり得ず、余剰分は皆のものになります。以上は、遭難者たちの島で如何に行われているかであり、そこでは豊かさや給料や公平さについて、私が黙考していることを進んで連れ回しているのです。最も創意工夫に富んだ人間は、何時も自分の役割だけを果たすようです。彼は何時も生産のための一日分を、労働のための一日分で支払うようです。そこには正しい交換があります。その他の制度は征服や略奪でしかありません」。

(一九一四年六月十二日)

議論が済んだ後、問題が解決した後、努力をして来て休息した後に時々想像力が、怒った蜂の群のように活発になることがあります。朝ベッドから起きる数時間前にも、そんなことが私に良く起きます。それから眠るのを諦めた時、私は容易に想像力に支配され、尤もらしい夢想によって私は目覚めた儘で眠れません。何も目新しいことではありません。それは出来事や会話や躊躇に良くある悪循環です。しかし、その時は何という明白な光でしょう。どれだけの自発的な思考が片隅で冷遇され、手を拱いていることでしょうか。陰謀、計画、意図、恥辱、まるであなたのように思われていたことやあなた自身の恥辱が全て、その時は強烈な印象を与えました。そして未来そのものも、あなたには現在のことです。バルザックの小説の主人公セザール・ピロトーが利益を図り、深淵を見たのも恐らくこの時刻です。しかし、彼は目覚めているけれども、夢の中のように僅かな時間です。暗黒の未来がはっきりと見えますが、それを変える如何なる方法も見付かりません。その様な状態で、多くの愚かな哲学者たちが嵐に遭った後の港のように希望を持ったのは確実でした。何故なら、それはまるで狂信的で情熱的そのものであったからで、古代ギリシアの復讐の女神エリニュエスでした。

現代人たちは、この種の精神錯乱が興奮とか動揺とか肉体によって齎されるという重要な観念を、良く理解していました。しかし、この観念がその時は公正な話の出来る相手のためだけであったのは明白です。あなたにとっての不幸は、情熱的人間であったことです。それはあなたが確実に輝いているイマージュそのものを、思想と見做していることなのです。そして、それは当たっています。何故なら、それがあなたに痛みを与えていることを崇めたり、敬意を払っているからです。あなたは、あなた自身に反対するのが正しいことになっています。それは不幸の最たるものです。

〈常識の王子〉である偉大なデカルトは、健全なる判断力の真の機能は懷疑出来ることだった、と恐らくこの地球上では最初のことを思い切って理解して言いました。そして二世紀後に、フランスの優れた哲学者であるルヌヴィエールは、最早疑うことを知らない人間を愚か者と定義しましたし、絶対に自分自身には自信を持っていました。そして力強い思想や、真に自分自身の主人である証拠は、ランプのように何時も概念の上に吊してある懷疑のことであるのは本当です。

この根本的な考え方を続けて下さい。如何なる疑問も構わずに注意して下さい。それは工場の計画、会計規程、結婚、離婚あるいは復讐であっても、第一歩目は決して懷疑からしか生まれません。あなたが自分の観念に固執すればする程、あなたが確信すればする程、あなたは前進しないで戻ります。その後で、最早疑うことが出来ない時、あなたの観念があなたよりも強い時、それは肉体のメカニズムが機能していることの特徴になります。これらの主張が全て正しい時は咳き込みとか、くしゃみ以上の意味も価値も持たないことが特徴になります。決して信じないことです。そこに人間の仕事があります。

(一九一四年六月十四日)

マキアベリのような人の当時の覚書です。「戦争の影響において、君主が自分の計画を邪魔する大変強い集団を見付けると、あらゆる方法で事態を何回も吟味しなければならず、先ず予期しない提案によってそれに挑み、その集団が全力で押し返すことは拙いことではない。あなたは次に、その集団が最初に拒絶したことを、殆ど熱狂して受け入れるのを見る。それは何故か。何故なら平和のための賭けにおいて、最も難しい勝利と同じ力を、最も易しい勝利にも使うのが普通であるからだ。同様にその成功は何時も力を分割するが、脅威によって先ず押さえつけるからである。同様に、短時間で二回も英雄的努力は与えられないからである。取分け喜びは、交渉には大変に不都合な状態である。幸福な人間はあらゆることに譲歩する。

提案が期待されていない時、無私無欲が当初は決して珍しくないことに私は気付く。期待しないことは、同じ活動によって拒絶し続ける。野心はその次に、後悔という形によってしか来ない。それ故に、何度も提案することを覚えなければならない。最初の拒絶は、誓いに従って居心地が悪くなる。しかし情熱に従えば、大変に居心地が良くなる。大きな犠牲の後では、多分疲労によって、褒美の考えが精神的に容易に齎される。私は、勝利によって美德が増大すると至る所で読んだが、決して信じない。

君主が意地を張るには多くの危険な伴う。というのも自分に対しての情熱を変えるからだ。彼は譲歩すれば何の危険も負わない。何故なら些細な行為によって、全てに容易に応えるからである。その代わり他の人々には、痙攣的な〈改革〉という力しかない。それは持ち上げるための重い石のようなものである。もしも殆ど持ち上げたとしても、何でもないようなものだ。何故なら、石の重みで又落ちるからだ。同様に絶望に関する助言は、石を持ち上げて殆どひっくり返す時も、その力が石の土台を再発見する毎に、何時も君主の耳には聞こえているのである。君主にとって最も必要な美德である忍耐はそこからやって来るのであるが、彼のような人間には最も有害である。

しかし、人が侮辱されたと思うのを防ぐ確信を、思い上がった人や野心家に如何に加えるのだろうか。一番信頼出来る集団は、余り信頼に気付くことなく譲歩するために、集団自体でお互いに騙すことである。虚栄心は何かの役に立つ。おべっか使いも同じである。矛盾が大きくなって来る時、知識は何の役にも立たない。というのも、その態度はこれからの時間を歪めるからだ。ルイ十六世は決して逃げようとしなかった。ナポレオンも決して降参しようとしなかった。如何なる種類の権力も、それ自体を疑うつもりはない。というのも、殆ど全ての変化や偶然は彼を有利にするからで、それが記憶に刻まれるや否や、不快な現在の真理が記憶の中で余りに長く止まっているからだ。それは実際の一つの真理であるが、判断に間違いがあったのである。それ故に英知に関する格言は無駄であるが、おべっか使いたちは大変に君主の役に立っている。そして、例えば兵役三年法が大多数の人々に賛成されていて、最早直ぐに反対者がいなくなるということの執拗さは、もしも夢想家たちでなければ、この執拗さが力を証明しているのであり、権力に弱さはない。そして更にそれに加えて、彼らは人が言っていることを信じているからである。意見

による戦いは、全てが意見による勝利で終わる。君主は短刀に対して中世の鎖帷子を持っており、意見に対してはおべっか使いと威厳を持っている」。

(一九一四年六月十六日)

普通選挙は、新しいものを決して何も生んでいません。その役割は、〈権力〉が自然に忘れられるように仕向けられていることを、世界と同じ位に古い真理という力と共に主張することです。

刑事訴訟を考えて下さい。公開討論や弁護の自由が当然に保証されているのは、誰も異論の余地がありません。私は〈自然法〉と言われている意味においても、自然であると言いますし、まさしく言いたいのです。というのも〈自然〉という言葉は、ここでは権力による策略とは反対のものであり、何時も権力そのものが強くなることに気を付けているものです。それ故に、全ての刑事訴訟の規定は決して全てを隠したりせず、発見するのは難しいものではありませんでした。不幸にも裁判官や君主は、それらを理解するにはまさしく非常に具合の悪い地位でした。彼らは秩序を、迅速で効果的に回復させることしか考えませんでした。彼らの関心の全てはそこにありました。又私は、彼らが嘗て不正を行う意志を持っていたとは思いません。あゝ、全てはその逆です。彼らは公正で、絶対に過たないと信じていました。自分自身を抑えることは少しも考えていませんでした。ところがその抑制することが、公正で均衡のとれた思考を生むのです。そして抑制のない権力は狂気になります。

余り言い過ぎてはいけません。私は決して大袈裟に言いませんし、決して誇張して言いません。彼ら自身に委ねられた権力は、教育方法としての責苦や拷問を発明しました。全くの剥き出しで単純に行うことについては決して考えませんし、それは少数独裁政治的文化の花のようなものです。権力と威厳と無謬性は酷い残酷な解決を生みましたが、合理的に裁きました。何故ならそれらの機能は単純化し、彼らの特性を強化したからです。それに従って全てが語られます。私たちが権力に白紙委任する度毎に、そこに戻ります。ドレフュス事件は恐怖させる一つの例を与えました。それはあなたとか私よりも盲目でなければ意地悪でもない人間たちが、牙城の中で自分だけの仕事に閉じ籠もっていれば良いと思うや否や、起こることです。困難なことと争っている経営者が、ストライキ参加者は人類の敵であると思うのと同じです。何であろうと、皆の英知が次の素朴な格言を生んだのです。「私たちの敵は、私たちの経営者である」。

その権利は隠されていませんが、権力者たちはそれを忘れています。彼らにそのことを思い出させることが一番重要です。権力者たちを抑えるためには、権力がなくても十分です。年代を土台にして生まれる多くの伝説は、独裁的な経営者が国民という人間に変装するかどうか、そして哀れな人々の素朴な意見を取り入れるかどうかを教えることしか出来ないと理解させています。普通選挙は、これらの伝説を現実のものにすることしか行いません。王は、四年間で一度変装します。王は喝采や諂（へつら）いとは別のことを聞きます。良識を取り戻します。そして確かに、そんな風にして王は自分の職務を学ぶのではありません。しかし、あらゆる職業の中で共通した権利があらゆる巧妙さを求めるのには、少なくとも限度があることを王は思い出すことになります。というのも成功は、全てが英知ではないからです。

(一九一四年六月十七日)

上手に話そう、上手に書こう、上手に詩を創ろう、上手に彫刻を彫ろう、上手に絵を描こうとする多くの人々の中には、殆ど本物の芸術家はおりません。それらに囚われないことが、真に美を目指すことになります。この良き方法に彼らは何時にも失敗します。例えば美しい文章を創りたい人間がそれに満足すると、私には分かるその意図によって、その文章は醜いものになります。しかし、もしも雄弁家が勝訴することを考えているとか、もしも作家が上手に描写するとか、稀有な行動を物語るとか、弱点を力強いものにしようと考えているなら、その時は恐らく一気に修正することなく、筆が幸運にも動いて上手に書けるようになります。

しかし、詩人たちはその時どうするのでしょうか。美を探ることなく詩人たちが詩を創ることを、あなたはどのように望むのでしょうか。詩人たちも同様にもう美を求めません。そういう時代は過去のものであります。詩としての真実の美を発見するためには、記憶を助けるためにしろ、何時も少しは歌が歌われる荘厳な物語であるにしろ、入念な叙述が何時も詩句を創っている時代に生きなければなりません。その時は辞書や文法書を見習うように、あるいは労働者が石に紋章を彫るように詩が創られます。それは労働でしかありません。描写しなければならない事柄と、課せられた方法のことを考えます。その時は、幸運にも一挙に美が生まれます。

絵画も同じように、画家は先ず課せられた板のような物に何かを創る労働者でなければなりません。例えば、それは良く似た肖像画と一緒に忠実に表現された歴史の一場面であったりします。その時は美と出会うことが出来ます。絵筆の幸運からそれを純化させます。大聖堂を建てた人々も、美しい大聖堂を造ることを考えていませんでした。美しいのではなく、大きくて高くて強いものでした。交叉アーチは、その様にして考えられました。しかしその次には、それを美しくさせるために、変化させて装飾したくなり、台無しにしました。バッハは教会のために合唱曲を書きましたが、それは生徒たちに歌うことを与えるためでした。あるいは時間を繋ぐために、パイプ・オルガンで即興的に曲を創って演奏しました。そしてフーガのように模倣したものを、熟練の規範に続けました。両手の幸運から、美がこの労働によって突然に生まれました。民衆の荘厳な歌は、恐らく儀式に応じて輪舞曲(ロンド)とか歌を口ずさむ物語でなければならなかった祭りから生まれたのです。テーブルとか食器棚が作られるように歌われました。美を探ることなく美を発見する純真さは、やらなければならないことを行う喜びと、仕事のための注意力以外の何ものでもありません。それは芸術家 (artiste) と職人 (artisan) という言葉が酷似していることを、余りに明白に説明しています。古代ローマの歴史家タキトゥスは注意深く語り、称賛し、非難する歴史の職人でした。シェークスピアとモリエールは、演劇の指物師であり大工でした。それは幸運な斧や鑿から大変に高度なものに達した職業です。その他の人々も、鏡の前で踊っているのです。

(一九一四年六月二四日)

(次章へ続く)

一人ひとりには自分のことや自分だけの利益しか考えないし、皆と共通した利益を少しも考えないと何時も言われています。私は、人々がたまには皆と共通した利益を考えて欲しいと良く思います。しかし、人々が自分だけの利益を殆ど考えていないことも私は気付いています。彼らは本当に、自分が行う困難であったり新しい行動のことしか考えていませんし、その場合は何時も自分だけの安全を無視しています。不器用で無謀で、自分自身にも他人にも無頓着な遊びをしている子供のようなもので、その様にして人々は行動します。かくして彼ら飛行士たちは、飛行船を追い求めて遊びます。そして同じ行動を取る人よりももっと怖い目に遭いますけれども、好奇心が慎重さを取り去ります。見物人になったのと同じです。その見物人は大変に怖がるかもしれませんが、狂わんばかりになるかもしれませんが、決して慎重ではありません。もし逃げるとするならば、慎重さはお構いなしで逃げます。パニックになると人間は軽率になり、無謀になる、と敢えて私は言います。本当の慎重さは、慎重に台本どおりに実行した俳優のものでしかありません。そして遊んでいるように、慎重さにも熱中しています。例えば、立派なパリの警視總監がそうですし、祭典の時の警察署長がそうです。彼は慎重そのものです。そして飛行士が無謀そのものが遊びであるように、慎重であることが彼の遊びなのです。これらの観察から分かることは、大変愚かな考えは放棄することです。学者ぶる人の考えは、大変に怖い思いをする時に人間を慎重にさせることが出来るというものです。

大きな船の船長を考えてみましょう。私たちは彼に慎重であって欲しいと思いますが、彼が慎重であるためには彼を苦しめる恐怖を当てにすることはありません。恐怖は人を狂わせます。恐怖の思い出は、少なくともどんなに小さなものでも今でも恐ろしく、そして今でも少しは人を狂わせます。軽率さは、屢々怖い思いをした結果であるとさえ私は言います。ですから無謀は一つの逃避です。

人間は少なくとも観念から慎重になるのです。そして、それは何時も見物人に見られているのを仮定します。その行為においては、誰も慎重ではありません。急いで行く人は何時も、危険な穴とか、崩れる恐れのある家とかを通っています。しかし障害物を置いて断固たる命令を下す者は、通行人よりも臆病ではありません。彼は慎重です。何故なら慎重であることが、今の目的であるからです。他の人が今汽車に乗りに行くから、彼も急いでいるようなものです。

でも、技術者たちに大きな恐怖が感じられる時は、そのことのために決して慎重になっていません。如何なる技術者でも、地下道とか鉱山においては、譬え危険が大変に確かでも良く分かっても、危険を冒します。ところで彼は、免職よりも押し潰されることを恐れるに違いありません。技術者たちに欠けているのは寧ろ、責任を持つことです。そして官僚的な制度は、十分明確にされた権力意識を存続させるために、労働を沢山に分割し、或る一点の中で行使し、そしてそれは全体の利害に関係しています。反対に一人の官僚の権力は、大変に広範囲に行使し、少なくとも或る一点の利益に関係しています。従って彼は、自分の権力と同じ位の権力と至る所でぶつかります。町の四つ角の王である御者が、自分の職務に慎重になるのとは違います。しかし御

者の権力は直接的で、しかもその瞬間は絶対的で、その中には英知があります。でも、その周りの欲望や情念や怒りや恐怖の総和は、好きなように調合されますが、決して英知という最小の土台を与えることはないでしょう。

(一九一四年六月二五日)

その経済学者は私に言いました、「ごく僅かな労働を必要とするものは、それによって、ごく僅かな価値しかないとあなたは言っている。もし一日に百キログラムの金を製造したなら、直ぐに金の価値が下がることになる。従って同じ価値で交換したかったなら、公平であれば一日の労働でその夫に非常に多くの食料を与えることは出来ないし、超過分は皆のものである。

もし最初の命題が真実で、ごく僅かな労働を必要とするものは、それによって、ごく僅かな価値しかないならば、その他のことも実際に証明されることになる。しかし、我々はこの最初の命題を認めなければならないだろうか。もし我々が価値を生むために雇用されて労働することによって、その価値を量ったなら、その命題は当たっており、誰も疑わないし私たちも認める。というのも、それは最早同じ価値しか定義していないからである。しかしアランよ、あなたは私と同じように考えている。もし混乱を避けたいなら、言葉は習慣によって使用されなければならない。ところが習慣は、価値と同じように決して決められなかったのである。もし二人の錬金術師が、一人は一日に五十キログラム、もう一人は百キログラムの金を製造したとしても、我々は尚それでも、一キログラムの金の値段を話題にしている。労働の時間が、共通の尺度になることはない。職工たちの処では賃金が支払われるが、一人が十メートルの布を織るのに、他の人は同じ時間に七メートル織る時でも、一メートルの布の値段が変わることはない。違うのは労働者の価値である。すると、彼は価値がない人間である、と大声で言われているのをあなたはご存知だ。あなたの言葉に如何なる意味があるのだろうか。

そうすると遭難者たちの島においては最早、価値が同じでなく、価値が明確でないのは何故だろうか。水夫たちや乗客たちは、習慣となった値段で交換するが、それは労働時間ではない。射撃が上手い猟師は、三発撃って三羽の鳥をものにして私にくれる。三日とか三分が過ぎたとしても、私にとって重要なことは何でしょうか。それは私が収穫した野生の果実と、その鳥を交換することである。私は必要な物を買うのであり、人間の辛苦を買うのではない。

しかし良識に適った定義で、人は望むものを全て証明している、と私は敢えて言う。新幾何学のように、直線は球面では大きな円になる。しかし、それらの直線に欠けているのは、直線として存在することでしかない。そして定義が変化しても、物事の本質は何も変わらないのだ。あなたの価値の定義は、人間たちが同一である世界においては真実である、と私は良く理解している。しかし、その人間たちに一つだけ欠けていることは、人間たちが色々に存在しているということだ」。

抽象的観念の恐れから、人は屢々別のものに陥って仕舞います。そして鳥撃ちの猟師や果実を摘む人の場合にも、私は何かが欠けているのを非常に心配しています。もしも彼らの欲望が全てを決めていたなら、恐らく彼らはお互いに戦うでしょう。交換を決定するために私が一番良く愛するのは、二人が友人となって同盟を結ぶことを考えることです。例えば、一緒に成長して大きくなる二人の兄弟です。そして私が先ず彼らに交換させることは、食料よりも労働です。例えば一人が家の屋根を修理すれば、もう一人はドアです。そこには交換あります。彼らの共同生活は

、長い交換でしかありません。苦しみは同じであり、幸福な思いも共通しています。私は他人の意見に基づくことよりも、この規範に基づいて公平さを決めるのが一番好きです。戦う者には同盟も社会もありません。

(一九一四年六月二七日)

厳密に公平な配分的正義に基づくなら、一番良く戦った者は一番良い戦利品を手にするようになります。報酬は、危険を負うのと同時に多くなります。暴力のお陰で裕福になる時の自然の摂理です。しかし、郵便局長や郵便配達人に給料を支払うのが問題になる時、この摂理を更に適用することは大変に馬鹿げています。理工科学学校卒業生は、郵便配達人の見習いが頭を痛めて考えないであっさり生きていた間に、厳しい戦いに身を委ねていた人間です。しかし、それは少しも中身の無い暗喩です。最高の能力を伸ばす機会を見出し、あるいは計算したり考え出したりするために使われる頭脳を持った人を、気の毒に思うのは少しも正しくありません。

私は寧ろその中に、幸福や羨望すべきものや報酬があるように思います。そして更に私が予測したり判断したり創意工夫したり、要するに指導することの責任を負っていると理解するなら、彼を気の毒に決して思いません。彼は王に生まれたのです。

注意力という規律によって、自ら準備することに同意する人々を手に入れるために、この困難な仕事には王者に相応しく十分に報いなければならない、と人は何か言いたいのですが、その注意力はこの上なく辛いものであり、気楽な人生や生き生きとした楽しみとは全く逆のものです。しかし、それは余っている土木工事人を判断することですが、最低の土木工事人はもうそこにはおりません。全てが逆であり、この高等な優れた労働はそれ自体が生き生きとした楽しみ源泉であると一人ひとりが理解しています。そして彼が勉強したり、本を読んだり、理解したり、技術者の労働に多くが似ていたりすることが出来る時、技術者が稀有な能力を発展させ、勉強によって更に鍛えられる時、それが労働者にとっては余暇の娯楽になります。

しかし技術者は、自分自身の最良の部分を発揮させることでは、何時も自由ではないとあなたは言うことでしょう。技術者にも土木工事を持っており、私は今までの時間を理解しますし、人為的なことは反故にします。結局のところ彼も期間を割きます。その意味において技術者は奴隷でもあると私は良く理解しています。しかし、彼に命じた組織の労働は、彼の好みや自然な精神活動を妨げています。それはまさに何かによって土木工事人が自分の仕事を手に入れるように、技術者は自分の人生を手に入れるのです。苦しみのための苦しみです。一方の人は読んだり書いたりします。もう一方の人は鶴嘴で掘ります。二人とも役立ちます。二人とも協力します。更に期間が同じなら、多くの人々は事務労働の方を好みます。何故なら綺麗ですし、戦争のリスクも大変に小さいからです。如何に奇妙な配分的正義によっても、人はまさに苦しみが最も少ないことでその人は報われます。その人は当然の結果である権力の行使を計算することなく、将来において自由な本当の働きである精神労働を時折手に入れます。

砲兵隊とか工兵隊の将校は、無線電信を勉強してその職務に精通するようになります。その労働は正しい働きでしかありません。もしもそれが彼にとって適正が欠けていて苦しいものであるなら、如何なる意味においても殆ど利益を引き出しません。しかし、この困難な知識を理解したり、〈電波の所有者〉をついに発明することが、類い希な幸運であったなら、彼は更に金銭的に恵まれて栄光を手に入れます。最も自由で幸福な仕事へ直進するのが、この奇妙な報酬です。

その発明者が既に、最高の利益を出す管理者でないことを私は分かっています。しかし人間を監督する者は、納得させて見抜く者であり、あらゆることに駆引きが上手い人間です。しかし、そのやり方で人の心を掴む別の人物にも本来の幸福があり、大変に生き生きとしています。というのも権力よりも心地よいものは最早何もないと言われているからです。その成功はここでも尚、加うるに彼自身による報酬です。しかし、私たちの奇妙な公平さは彼に年二五万フランを与えています。人々は自分の幸運に応じてお金が支払われます。私にとっては、彼が譬え年三千フランしか稼がない優れた技術者であったとしても、彼は今でも土木工事人でありたいと願っていると私は思います。これらの考えは、少なくとも時間を計算に入れるなら、労働を変えても不条理ではないと分からせるためのものです。それは既に、自然な不平等に多くを委ねているのです。しかし、私たちの正義はその不平等に怒りを覚えるのです。

(一九一四年六月二九日)

愛することも憎むことも容易です。困難は判断することです。水浴愛好者は水に這入る前に、屢々身震いして長く何時までも考えます。そして、一気に飛び込みます。そんな風にして考えを一つに決めることは良くあることです。全てはそこから始まります。私たちを引き留める理性は、敗走しているようなものです。打ち勝ったものだけが、精神全体に広がって行きます。その様なものは、情熱の遊びです。もしも私とその障害物を弁護して逆上したなら、私の敵は全てが悪徳であることを望みます。そして女性も同じです。

この逆上は政治にも共通しています。そこから全く逃れることは、同じく困難です。私たちは何時も天秤のように判断したいと思っていますし、最も重い方へ傾きたいと思っています。人は傾いている方へ屢々落ちます。良く知られているのは、一回目の投票後に勝利が良く決まることです。例えば、優先権についての投票があり、勝った集団はその内容について投票される時に援軍を受けます。そして巧妙な計算をそこに見るのは容易で、彼らは最も強い者たちと一緒にいたいと思っています。それは自然な動きであり、引力のようなものです。決心が明らかになります。私たちは誰もが同じです。私たちが態度を決めた時、全ての理屈が同じ方向へ行くのです。均衡を保つことは、事物を十分表すものではありません。比較が正しいものであるために、重量は最も低い方へ滑って行くと思わなければなりません。あるいは、もしもあなたが望むなら、情熱は船が転覆するが如くに決心をします。一方の船の裂け目から浸水すれば、更にもっと傾くのです。

人も三年兵役制の方へ傾きます。その人が無知であり、態度を決める必要があり、危険が大きくなれば、そちらへ投票します。しかし、彼が決心させられると直ちにあらゆる将来展望が変わります。それが明らかで素晴らしいものであって欲しいと彼は思いますが、とうとう最後には最早何も戻って来ません。精神は水中へ放り込まれます。彼はこの種の眩暈によって今では崇めています。というのも情熱に従って決心させられた後で、人に納得させられるのは大変に簡単であるからです。それが改心と言われているものです。でも狂信とは、この大変に強力な理性に勝った後で、それらの理性とは反対の、まさしくこの情熱なのです。

反対の集団も同様に閉じ籠もり、力をつけます。それは他の側面では瓦解です。集団の一人ひとは、他の意見を危険な狂気と見做します。そして危険な狂気とは、自由な判断を守りながら、必要性から決定するのが難しいのです。

ところで多くの人が曖昧と判断しているが、私は賢明であると信じている今の政治に、この断固たる英知が少しはあると私は理解しています。判断したものを崇めるとか呪うには最良のことがある、と人は気付いているようです。それは肉体に従うことであり、宗教からは自由な判断力を守ることです。やらねばならなかったことを、言わないことです。「それが最良だったのです」。最初の同意によって決して改心しないことです。改心というこの古い言葉には、何世紀もの奴隷制度を表しています。奴隷では駄目です。そして理性が勝つには、しっかりすることです。「私の肉体は屈服するが、精神は屈服しない」とフォントネル(1)は言いました。思慮深

い言葉においては、望むことは事実を否定することです。良く理解しましょう。私は最近、表面的には愚かな例を引用しました、「ヨーロッパの平和が絶えず大変な脅威に晒されていると私が理解した時、私には平和を望む勇気が少しもない」と或る若い政治家が言っていました。当初の負債にお金を支払えないという絶望によって、この種の狂気は大変に一般的になるので、そこから他のことが行われるのです。

(一九一四年六月三十日)

(1) フォントネル(一六五七～一七五七)は啓蒙思想の先駆者の一人である作家・思想家であり、コルネイユの甥。

「私はそういう性格ですし、それ故にそれを証明します」と誰もが証拠を示しても、私は決して信じませんでした。しかし、そこには喜劇も沢山あります。又、それらの場面も状況も既に、沢山生まれています。職業は人間を変えます。周りの意見は人間を変えます。彼自身は、自分の役割に応じて化粧します。服装、いつもの表情、首をかしげる仕草、声音でさえも全てが或るモデルに従って、そっくり模倣されます。それらは全てが人の意見によって作られ身に付けますが、人の意見のために身に付けるのです。幾つもの場面があっても正義は変わりません。しかし、状況を変えて下さい。人間は適応して自分を合わせますし、大変に早いものです。

お金について決して重大な心配事が生じないように、収入によって家計は決められているのに、パリ人は車の噪音を聞く以上に他の人々がそのことを考えないで債権者の中で生活するのを見てびっくりさせられます。気楽に生まれた人間というものがいるのだろうか。しかし、私はそのことに関して信じていません。私は借金のせいで無頓着になって浪費する人々と知り合いになりましたが、それまでの外部の状況が変わって彼らの会計が釣り合うや否や、殆どの人が吝嗇になります。その人は、信じられない位に変わりやすいのです。バルザックは、一人の農民が内戦後に彼の後に雌牛を引きながら、フジエール市場から戻ったのを私たちに見せてくれます。それは〈歩く大地〉という渾名をもった反革命派の恐るべきふくろう党员で、彼は自分の手で二十名以上の人を殺していました。

ある意味では性格は複数あると言えます。権威を失った人間とか、成る金になった人間であるなら何時も分かります。彼の眼が多くを語っています。彼の微笑は真似の出来ない表情で、私を見る眼と不可分です。ここには少し涙で濡れて子供っぽい眼があります。慎み深い精神できらきら輝き皮肉にも生き生きとした黒い眼もあります。私はこれらの違いを愛します。私は、それらの違いを見分けるのに飽きません。しかし、非常に際立っているこれらの相違は、個人個人よりも寧ろタイプの違いを明らかにしています。でもその数はそんなにも多くありません。額と首の形にも生まれつきの相関関係があるようです。髪の毛やひげの生まれつきの縮れにも、一つの典型的な人間が示されていますが、それ以上に血族によるものもあるようです。市内電車に乗るために集まってくる人々を見ると、お互いに異なっています。そして私がそれまで見て来た人々と似ている人は一人もおりません。又、これらの顔の生まれつきのタイプは、同様に精神的に定義出来る性格と一致することはありません。退化したタイプを除いて、医者が見分ける術を知っているのは、各々の生まれつきのタイプにある優しさと乱暴、執念深さと無頓着さ、知性的と荒々しい野獣性です。大変に形が良い大きな額で、しし鼻が低いソクラテス的な顔の人が、非常に濃い髪の毛で区切られた平凡な額の人よりも、偉大な思想を最も良く語る訳ではありません。

写真を見ても微妙な違いはありません。それでも屢々意味深いものがありますが、新聞からは殆ど何時も、殺人者が誰で、殺人者を逮捕した勇気ある市民が誰であるかを見抜くのは非常に困難です。更に私たちに分からないことは、演技によってあらゆる情熱が強くなることであり、私たち自身は自分の判断によって一人ひとりの人間を生かさざるを得ないことです。取分け、私た

ちが子供たちを判断する時はそうです。「意地悪。嘘つき」。子供たちは、この様に直ぐに言いますが、私たちが信じています。彼らは、彼らの役を演じています。子供たちだけの能力で真実と思う判断は、信用しないようにしましょう。

(一九一四年七月二日)

ヴィクトル・ユゴーの最も奥深い思想と、最も美しい詩を私が発見するのは、『レ・ミゼラブル』の最初の部分です。この聖なるビャンヴニユ司教は偉大なる奇跡を起こしますが、神ではなく、少なくとも勇気と判断力によるものです。これらの頁を私はその奥深さに触れることがなくても、何回も何回も繰り返し読みました。如何なる作品も私には、これ程までに学識深いものはありません。倫理というものがそこにあります。そうです、この簡潔で力強い作品の描写には、世界中の善意が全てあり、感動的で素直です。キリスト教の秋が、そこで実を結んでいます。周りを探すのではなく、その中を探して下さい。信仰と奇跡がそこにあります。それはローマ皇帝で禁欲主義哲学者のマルク・オレールを超える唯一の作品です。

全てのアカデミー会員や文学者から、私は善いものは何も期待していませんでした。彼らは約束出来ることに拘っていました。それは何時も雄弁術教師や大袈裟な人を称賛することです。でもユゴーにおいては何時も最高のものを歩む観念があります。何時も明らかではありませんが、何時も存在しています。時には眼に見せてくれるレトリックの使用も、それを表現出来ないものから生じます。それは言うべき中身が何もない空疎なレトリックとは全く反対のものです。しかし私が考えている頁においては、その観念が日がな一日あります。ジャン・ヴァルジャンは開いているドアとスープとベッドを見付けました。彼は物を盗み、逃げて再び捕らえられます。「全てはあなたのものです。私はあなたにそれを与えたのです。あなたは何も言わなかったのですか？」と司教は言います。以上は冒頭の件です。しかし、反省が続き、そして行動を起こして走り、もっと正確な観念に打たれます。「あなたは正直者になると約束したことを思い出さない」。ジャン・ヴァルジャンは言う言葉も無く、夢の中に陥ります。翌日、歌ったり泣いたりする煙突掃除夫の子供から二スーを自分のものにして、殆ど恐ろしい姿になった動けない彼が再び発見されます。彼の足は既に泥棒のものです。つまりそれが全てで、再犯したのと同じでした。

戦争は戦争を終わらせることが出来ません。というのも復讐心は正義と余りに似ているからです。そこには一つの選択しかありません。武器という武器の全てを捨てることです。しかし、人は決してそうしません。ここに戦争の醜さがあります。私はここに大変な恐怖を覚えます。大きなことにも小さなことの中にも覚えます。次に述べるのは、好意の中の一つの雲です。あなたは直ぐに仲間を観察して期待します。あなたは好意を示さずに、彼の好意の重さを量ります。「彼は得だろうか」。しかし、あなたは大目に見るしかありませんし、彼は得をします。先ずは与えなければなりませんし、断じて与えることです。信じるべきです。しかし、一般には与えなければならないことを除いて、全てが与えられているのです。最も深く愛されている子供と同じように、疲労とか弱さから許されることを、私は一般に理解しませんでした。影をひそめる真正の判断を除いて、全てが彼らに与えられています。それは愛が既に思いやりでなくなっていることを分かせています。「あなたは許される」と愛は良く言います。しかし、「あなたは許されるに相応しく、私はあなたに何も与えない。あなたが正しいことを私は知っている」と愛は決して

言いません。それは泥棒や嘘つきや侮辱する人のためです。本心なのです。というのも彼を信じなければならぬからです。それなくして決して真実はありません。最も小さな疑いも全てを台無しにします。あなたは「ご免なさい」と言います。しかし、「否認」を人は読みます。そして顔も同じように応えていて、刑を宣告しています。その様にして平和は戦争よりも良いものでなくなります。「あなたの敵を許しなさい」と言うのは間違いです。そうです。しかし、敵は決していないことも知ることです。不幸な人々に同情することよりも、良い何かがあります。それは彼らに幸福を考えさせることです。病人の看護をすることよりもより良い何かです。それは彼らに病気が治ることを分からせることです。攻撃を忘れることよりもより良い何かであり、それは攻撃することが決してない、確かな学識を知ることです。そして、その啓示が慰めであり、それが悔悟の真実なのです。

(一九一四年七月十日)

何かと批判する人の本から私は昨日、一般大衆が証拠よりも主張の方をより愛する、ということを読みました。しかし、それは表面的なことではありません。皆はそこまで言っています。それは決して弱くなく、力強いものです。私は、両者に残されている教養半ばの精神よりも弱いものは何も見ません。それは証拠があるか無いかで意見を変えるものです。真面目な人間の精神は、事物の陰部や局部を表すことでしか証拠として考慮しませんし、それはより正確に理解させてくれます。さもないとその精神は、紋切り型でそれを壊すのが難しい裁判を求める老いた判事のように、弁護士たちに委ねられます。全てを立証出来ると気付きながら、人は何かを逃します。そうです、〈数学〉と同じで、適切な定義を考察しながら、尊敬すべきユークリッド幾何学をひっくり返すことになります。それがひっくり返されたのは確かですが、パンはパンとして存在しているように、その後も栄養豊かでないことはありません。

議論の遊びを信用してはなりません。その遊びは神学者たちには良いことでした。何故なら彼らは神聖な確信を先ず定めていたからです。しかし、私たち市民は別で、観念世界では用心します。そして私たちが用心するのは、議論を伴うものではないのです。もしも私がイエズス会で創られた哲学を何か引用し始めたなら、型通りの反証や懇願や反論に気付きます。そしてこの一斉射撃のような議論は何でも、私にとって何時も意味の無いものでした。私は現実の一つの考えに期待しますし、一つの考えはそれにつれてより良く思考して、より良い精神を齎します。私が見る限り本当の相違は、真実と誤りを思考することではなく、何かを思考することと何も思考しないことにあります。例えば、贅沢にお金を遣えば労働者を生活させることになるという時、何か正しいことを言っているようですが、何も思考していないのです。豊かさも労働も交換も理解していないのです。あるいは人間はお互いに自分自身を愛していると言う時も既にそうなのです。それは情熱とか行動を理解するために、証拠も無しに全てを決して私に主張しないのです。この例は強い印象を与えます。何故なら、人間が自分自身しか愛さないということを証明するよりも容易なものは何も無いからです。証明するとかしないとかは、何時も決して意味が無いのです。

判断をしなければなりません。この美しい言葉には意味深いものがあります。真実は決して突然現れません。真実を創らなければならないのです。議論というメカニズムは、私が知的な〈支持者たち〉の家で時々驚かされる詭弁的動揺しか与えませんが、勇気は無く、鞭で走り回るサーカスの馬のようなものです。きちんと思考するには、緻密さよりも勇気がなければならないと私は思います。物事を良く見ることです。そして取分け、議論を超越することです。例えば〈比例代表制〉に反対する沢山の証拠を私は確かに見出しました。そして別の人々は多分、私とは反対の証拠を沢山見出します。しかし、あらゆる点において言葉と共に私が飛び去るのではなく、事物そのものの再現を求めます。私はこのやり方で、影響や陰謀や人間や党派を思考しようと努めます。私はそこに、望ましい忍耐の全てを注ぎます。私は口論を終わらせる議論の勝者のようなものを全く信用しません。そうです。しかし、その対象は确实さに欠けているように私には見え

ます。私はそこでは言葉しか理解出来ません。

(一九一四年七月十三日)

トウールでギロチンにかけられたその殺人者は、一種の驚くべき勇気を見せていました。黒い洗礼盤へ急に落下する前に「一、二、三」と遊んでいるように数を数えることは、超人のように見えます。辛さもなく自分自身のことを考えて、人生を愛しているようにも見えます。しかし、自殺することを考える人間は、お金がないとか、失恋したとか、単に退屈だからとかにしろ、感嘆すべきことは少しも考えません。私は良心の呵責のことさえも話すのではありませんが、監獄へ入れられた人間は、暑かった日中の後で一風呂浴びるように、空虚に陥るようになるのは良くあることです。

彼らは死が怖いと言いますが、私は決して信じません。でも、彼らが病気になって死を恐れることが良くあるのは本当です。しかし、病気は一種の恥辱であると言わなければなりません。私たちはその時、一つ一つの動きに大変生き生きと感じていた手足の自由な使用を失っています。多分、痛みよりももっと悪い肉体的衰退という感情があります。飲む時に喉を詰まらせる人は、勇敢であっても大変な不安を抱かずにいられません。恐怖はここでは悪と同じものです。又、その恐怖が屢々理屈もなく私たちに襲ったり、恐らく何時もそれが肉体の中に隠されている原因によるとするなら、死への恐怖を想像することが良くあります。取分け、この考えには私たちが恐怖を抱いた曖昧な想像は、対象もなく加味された迷信であるか否かであると言えます。

しかし、もっと簡潔に言うなら、私たちは沈鬱、懸念、近親の死や他者への愛によって、自分自身への愛よりももっと大変に強いものになります。死の観念が、不安や悲しみというものを可能な限り加えて行くのが分かります。そして優れた人は、涙を流した人々と一緒に、前もって共感するようになれるのです。誰も愛さず誰も涙を流さない人は、簡単に死ぬ必要があります。他人に慣らすことが出来る苦しみで自分を慰める者たちは、既に多くのことによって慰められています。

陽気な行いや生き生きとした情熱には、安全そのものを考えるものは何も無いのが常です。

「一、二、三」で人は跳びます。以上は、戦争が可能になる理由であり、戦争が容易でさえある理由です。以上は、つまらないことで剣と剣で決闘する理由です。しかし怒りは、人が自分に与える病気なのでしょうか。一人ひとは些細な一片のこととか、たった一回の行為で自分の人生を捧げます。そんなことは良くあることです。そして恐怖も同じで、慎重であるものは何もありません。パニックは、英雄主義と同じ位に、死そのものにあなたを良く投げ入れます。その時、パスカルは次のように書きました。「私たちは楽しみと共に人生を見失うが、そのことを人は話せば良いのだ」。これは深刻でないことはなかったのです。少なくとも言わねばならないのは、「私たちは楽しみと共に行動する。そして楽しみは私たちに恐怖から完全に解放してくれます。怒りも同じですし、恐怖も同じです」。そして戦争も、怒りのように悪意から私たちに解放する、悪意の極致でしかない、と私は明白に理解します。私の友である困難は、平和を愛することであり、人生を愛することです。

(一九一四年七月二十日)

あらゆる勲章を辞退する首相の問題について(1)、その様な社会主義者として筋を通さなければならず、自分が辞退するものを他の人には決して与えてはならない、と私は言うものではありません。全くその逆です。この微妙な問題は、代議士個人がきっぱりと決めなければなりませんし、他人が判断するものではないと私は思います。しかもこの考えは、その問題の本質に触れています。誰もが自由を守らねばならないという倫理的権利が、ここでは重要なのです。真実を話すためには、権力者たちに何時も新たに抵抗することが重要なのです。あるいはこう言った方が良ければ、良心に心を動かせば権力者たちの大きな屈辱になることから、彼らは良心に心が傾くことが決してないということです。もしも全てが外見にあって、中身は酔っ払っているなら、自由は失われます。

人はこれらの外的な印を全て完全に軽視することが出来ますし、心惹かれることのない讃辞はその資格が無く、心の秘奥に照らして何も無いのです。多くの人々がそんな調子です。「哲学者は洋服屋から服を着せて貰っている」と十七世紀の作家ラ・ブリュイエールは言いました。権力者も大臣から勲章を貰っている、と同じことを言いましょう。そして、それがもしも一つの形式でしかないとしたなら、それは重要ではありません。しかし世俗の権力は、何時も教会を狙います。でもそれは可愛らしい小さな罪です。それは良心に従って、何時も結びついたり離れたりしたがついています。ところで今はそれを、きっぱりと全て止めなければなりません。今は税関が出てくる幕ではありません。税関よりも暴君を気持ち良くさせる、諂(へつら)いもありません。「もしあなたが私を褒めるなら、私も私を褒めます。私の判断はあなたにお任せします」。それはまさしくローマ皇帝に敬意を払うことです。それは、どんな冠でも構いませんが、冠を戴いた頭は最早直ぐに良識を持たなくなる、という悪習によるものです。

「あなたが公爵だから、私あなたが高く評価する必要はないが、私はあなたに挨拶をする必要はある」とパスカルは書いた後で、この考えを解消することになりました。というのも、その公爵は挨拶されると同時に高く評価されているのが良く分かったからです。つまり心から挨拶されていて、服従からではなかったからです。するとそれは良心が何かを容認しなくなります。評価とは、最も貧しい者でも何時も何かを与えとか拒むことが出来るのが正しいことです。もしそんなことを考えたなら大変に豊かになります。しかし、もしそれを意味しなかったなら、少なくとも冷たい沈黙によって全てを失います。ところで人間の倫理的判断を受け入れて、それに感謝することは高く評価して良いことです。

さて、主人たちは良く要求します。主人たちが与える紐は、まさしく従属のための首輪になります。従属は主人たちによるのであり、尊敬ではないという原則をしっかりと覚えて置きましょう。尊敬には自由が残されていなければならず、少なくとも人物の美点や長所を模範にしなければならず、決して職務や役割によるものではありません。権力者はお金を払うのであり、それで十分です。もしも高い評価という報酬を分配すると同時に受取ることを何度も熱望したならば、彼は横領し篡奪(さんだつ)します。ところが紐や勲章は、まさにこの野望を表し

ています。演説や儀式もそのことを非常に強調しております。更にその上、一段と子供じみた喜びであり、正直で誠実な人間には眼に見える報酬が最大に置かれていても、けっして上手くやることが出来ません。その様な感情の流出を止める態度は、重要でなくもありません。称賛するための偉大な権力は、貧しくて弱い人に任せましょう。全ての権力者たちにはそれが十分な重りになります。武装された讃辞では、冷ややかな取り付く島もない顔になります。

(一九一四年七月二七日)

(1) ルネ・ヴィヴィアニ(一八六三～一九二五)のことである。彼は「ユマニテ」紙をジョレスと共に創刊した。統一社会党結成に協力するが離反し、社会共和党を組織する。文相・法相・首相を歴任した。

犯行を計画するとは何でしょうか。計画された犯行の典型が、自動車強盗団による有名な〈社会全体〉の事務所への襲撃です(1)。ここには起こり得る小事件も全てが予想されていて、それに応え得るあらゆる行動が同じ結果に向かって行きます。そして、それらの犯行が複数の人間による注目すべき場合には、議論と決定と実行が本に書かれているように連続して行われて行きます。

しかし、それとは違う計画された犯行もあります。それは様々な行動、精神的に不安定で哀れな彷徨者でしかなく、誰も彼と約束する者はおりません。その目的は全く曖昧です。如何なる決定もされず、それはまさしく準備を可能にすることであり、それが実行の始まりです。何も手に入れませんし、自由そのものを人に委ねていると思われています。ドストエフスキーは『罪と罰』にて、この精神の働きを分析しました。確かに、悲劇のこの主人公が予め自分の罪を想像する度に、結局は立ち止まり、恐ろしい想像によって思いとどまり、それが多分安心させてくれるのです。しかし小説家の作り話であるが悪意ある物事となって、予め想像した機会をその都度与えているということが起こります。そうして行動が、穴の中の水のようにそこに落ちます。彼は準備したのであって、決定したのではありません。それは私たちが戦争に参加したならば、殆どそのようにして戦争に参加するのです。それを望まなかったとしても、私たちはそのことを良く考えます。事物などが私たちに道を与え、私たちはそこを通ります。それらの許可は想像力に委ねられていることを最早疑う者は何もありません。落下のことを考えすぎる人々のようです。彼らは落ちます。確かではありませんが、彼らはそれを望んだからです。しかし考えすぎたからでもあります。そして私たちの力は恐らく、私たちの行動よりも寧ろ思考の上にあります。犯罪を思いとどまらせるには何の役にも立たず、そこに導く考えに変えなければなりません。でも、それは十分に分かっておりません。そうして私たちは率直に、それが既に彼らの結果に基づいて決定されていると理解することなく、情熱の感情に任せているのです。それは次のように言ってピストルを手にするのと同じ様に軽率です。「それは私が役立つと少しも言いたくない」。その人は自分自身に対しては余り悪賢くありません。

自殺する者たちに勇気を持つように良く求められます。しかし彼らは目が眩んで、眩暈から自殺することが大変に良くあると私は思います。何故なら、まさに彼らは自殺を望んでいなかったからです。この不幸な観念から準備する彼らは、けっして怖がりません。「私は大変に自由だ。それは私を決して拘束しない」。従って彼らは行為の縁まで一步一步進み、黒い深淵の底を見詰めます。ところがその瞬間に、事物という思い通りに行かないものによって最早、止め装置のカチツという音しか期待しないのを確認したくなるのは、痙攣的な否定の動きや恐怖であることは十分にあり得ます。しかし、事物のこの悪意は人間のものでしかなく、悪意というよりも寧ろ軽率さです。その人は、素っ気ない活動の全てが行為となる点へ導いたのであり、十分に指導されていました。従って椅子の上に立って首にロープを巻いている人は、望むとするなら、如何に首吊りをしているように見えるかを見せるためなのです。一寸した眩暈であり、彼を首吊りの気

分になります。そして良く熟考して計画します。

(一九一四年七月二九日)

(1) ジュール・ジョセフ・ボノ(一八七六～一九一三)は、無政府主義組織のリーダーであったが、徒党を組んでパリとその近郊で銀行などを襲い、多くの自動車強盗を犯していた。彼は一九一二年に逮捕される時に殺され、翌年に四人は死刑、十一人は懲役刑となった。

(次章へ続く)

人はもう一度この警報の中で、人間としての堅い勇気に驚嘆するのが気に入ります。又、私にはその様な警報から、恐怖以外に人が望む全ての結果が私たちの裡に生まれるように思われます。その様なことは至る所にあると確信するかもしれません。しかし、何故驚嘆するのでしょうか。我が国の人間、文明化された人間、物理学者や機械技師という人間は、些かも臆病な動物ではありません。彼は時々小さな美德に欠けますが、最高の呼びかけで偉大なことを見せてくれます。そしてもっと言うなら、彼はこの男性的な活動を自分自身に感じれば幸福です。そうです、幸福なのです。取分けブルジョア的生活を送っていたなら、つまり多くの詰まらないことを気にして、目的もなく多くの小さな尊敬に縛られて、その中で結末もなく気難しい情熱にかき回されたなら、結局は管理することよりも管理されて仕舞います。突然に自分を他者と感じて、より良くなります。そのことをもっと正確に言いましょう。行為に関しては、彼は自分の能力を全て使用しますけれど良くなりません。権利が気になるだけです。しかし、その中が一番良いのです。何故なら、下痢を起こしている低俗で動物的な多くの人々を、活発な活動で管理し支配するからです。その様にして彼は、すっかり忘れていた幾つもの苦難に耐える王の誇りを思い出し、目覚めるようになります。

しかし、内面的動きとしてのこの活動を冷静に判断しましょう。それは危険だらけです。もしも人々が臆病であったなら、決して戦争は起きません。でも、それは動物と同じ状態であり、誇りもなければ如何なる正義もないと理解しましょう。そこから戦友たちの話の中で、人情というものをもよく理解する何かが言われます。しかし今となっては間違いです。恐るべき間違いで、それは平和な状態を間違えており、表面的な判断によって多くの人間は臆病で卑劣であり、それを引きずっているが振り落とさなければならないと思っています。決闘や救助活動に見るように、それは大きな間違いであり、大変に軽率です。大それた軽率ですが、普通のことです。恐るべき間違いです。何故ならピンを刺したり、鞭で打つということは、何かによって分別のある動物を怒らせて喜び、他人に証明したくなると、そして自分自身にも証明したくなり、軽蔑されることしかこの世で恐いものは何も無くなると、戦争のための戦争を良くやるようになります。それ故に、真の賢者は心を打つ言葉で節度のあることを示し、最も良いことを判断して自分自身の最良を説明しながら、この惑星の主人である神を寧ろ宥（なだ）めることに専心するように私は望みます。

平和は、恐怖から生まれる果実ではありませんし、これからも決して恐怖から生まれません。そして平和は理性的なものです。良く吟味してみてください。好戦的な集団は何でも、大変良く興奮します。彼らは、通常は物静かなブルジョアですし、世間を気にして、彼らが本来の美德を身に付けるための体験には不十分であると私は敢えて言います。そして平和を目指す友人たちは、反対に戦う人々であり、毎日危険な目に遭う困難な生活をしています。未成年者、土木工事人、運転手、大工、石工、農民は、ナポレオンの〈偉大な軍隊〉の人々であり、頑固で強情な人々です。彼らにとって戦争は、二日に一日の割合で殆ど甘く心地良いものです。しかし、

彼らは殆ど世間を気にすることはありません。彼らは敵に恐怖を感じることも決してありません。平和という美しい夢を抱くために大変に強いからです。

(一九一四年七月三十日)

セント・ヘレナ島でのナポレオンの最も美しい言葉は、私の考えでは次のものです。「あなたは、何も後悔しない男を見ているのである」。八月十五日に、イギリス船でナポレオンの支持者たちが祝典のためにやって来た時、そんなことは少しも考えていなかったことを理解するのも素晴らしいことです。そこには精神力の力強さがありますが、思っている程そんなにも珍しいことではありません。負けることの恐れは、負けたことの苦しみよりももっと苦しいことは良くあります。そしてどんな場合にも、私たちを苦しめるのは思考です。というのも、もしも死刑台へ連れて行かれる人間が、そのことを考えなかったとしたなら、苦しみは何処にあるのでしょうか。予想を自らに禁じることを知る者は、あらゆることに最悪の苦しみを取り除かれることとなります。困難は多くの場合、予想が作用するのです。しかし後悔には苦しみしかありません。思考による苦しみです。それ故に乗り越えることが賢明です。そして戦いが絶え間なくとも、日本女性が瞬く間に手を返すようなもので、それは可能であると私は信じます。「嘆いても役に立たない」のです。考えずにものを言ったなら、愚かな言葉を言うだけです。しかし、もしもそのことの意味を理解したならば、さあ、全てが上手く行きます。

禁欲主義者たちは一つのことを乗り越えるために、体操教師のように練習して、そして次に他のことをやります。不幸の彼方を見詰めるために背伸びをする人のようです。その人は少しでも思考の教師になるや否や、屢々そこに辿り着きます。しかし夢中になる処をもっと知らなければなりません。それ故に禁欲主義者たちの次の箴言は快いものです。「判断を削除しなさい。あなたは苦しみも削除します」。そしてこの力強い英知を最も良く理解させるために、私は良くある幾つかの例として理解させるのですが、その人は諦めて大変に些細なことでも直ぐに絶望して、全て間違った判断に従うことが良くあります。もしも精神的に弱いとしても、全く根拠の無い考えによって不幸になる狂人とは何でしょうか。

しかし、彼は何も出来ないのでしょうか。それはとんまな人間の反論です。遭難した時に、中風患者とか、もっと適切に言うなら両足を切断した男は、独りきりでは自分を救助出来ないことを私は知っています。しかし私は、丈夫な足をした人々を見ても、彼らが立派に役立つことはありません。大変に良く言われていることですが、彼らは残忍とか恐怖から足を切断されて取り残される代わりに、やれることが分かるためには体操教師が役立ちます。味方になります。体操教師でなければ、同じ方法で私たちの判断が鈍っていることもあり得ます。しかし最も大きな狂気は、体操教師というものが役に立たず、思考について誰も何も出来ないと決めつけることです。そして、そのことを良く信じている人にとっては、それが本当であるのは余りに明白なことです。そして幸いなことに青年には殆ど聞こえないのですが、人が時々教える宿命論全体には狂気の小さな粒があります。しかし、後では思考そのものに如何なる力もない観念によって、正しい精神は屢々弱くなります。この問題において聡明な人は後者です。もしもそれが真実であるとあなたが信じるなら、そしてそれが真実でないかもしれないとすれば、あなたはそれが真実であると信じないことが第一に非常に重要なことです。同様に足や腕を動かせたとしても、本当に疑

問を持つ男や、正しい議論による救済を期待する男も、下着の袋のようにそこに取り残されます。しかし今日、何故そのように思考するのでしょうか。まさにこれらの禁欲主義的美徳による脅迫的な戦争のせいです。最悪の悪徳は、人が言う以上にその人間には高い価値があるとまさに見せていることです。

(一九一四年七月三十一日)

私たちが聞いた祖国愛についての演説は、何と曖昧でしょう。完全に政治に関する方針が全て失われているので、戦争の動きが完全にスラブ人たちの情熱次第であるのは明白であることが、今は良く理解されています。更に悪いことに、この国際的脅威においてフランスは、あらゆる否認を無視して疑いを持っています。上辺は道理がない訳ではありませんが、結局は復讐するためにヨーロッパ紛争の機会を窺っていない訳ではありません。そして国境には武装した大軍の部隊が配備されて、政治的には隠された巨大な部分であっても、良く分かる意味合いが私たちには見えます。地理的状況や武装化や両国間の自然や歴史上の力関係によって、東側の大戦争の準備が困難で骨が折れる間に、我が国の国境には破局が相次いで起きるようになります。他国も軍隊の輸送を行えば、恐らく我が国は五万人の死傷者を出すでしょう。

解決策が我が国に有利になるようにすることはあり得るかもしれませんが。もしも最後と思って武器で復讐するなら、過去になかった位に有利な状況を保持することさえ可能です。しかし本当の問題は、〈国家〉がその様な政治を選択したかどうか、あるいは意に反して曖昧な演説によって導かれていたかどうかを知ることです。ところで、私たちには領土防衛の厳格な条件に代表されるように、何時も時間とお金の最も重い犠牲が示されました。何時も私たちは、断固とした平穏な政治であっても、攻撃されるかもしれないと聞かされて来ました。三年兵役法は、国境を守るためのものでした。私たちは全てがその目的に賛成して、それらの方法以外については議論しなかったように見えました。

現在の状況において、一人ひとりはそのことを理解することが出来ます。ロシアはバルカン紛争の全てに決定的な役割があります。ロシアの力は既に、国外同様に国内も戦争の法則が最高の法則となって組織すべきものとなっています。ナポレオンが予想したロシアの侵略は、オーストリアの崩壊によって恐らく機械的に行われて行きます。ところが均衡の取れた法則によって、私たちはこれらの力関係の内において、西洋の英知を持っています。私たちに有利になったとしても、力の勝負に耐えられないのが確かであると同様に、厳正な礼節が要求されます。私たちはこれらの力の中に身を置いていますし、そこに現実があります。現実を否定するのは狂気です。しかし現実と共に走り出すのも、やはり狂気です。私たちは巨大なロシアの調停者です。私たちは武装状況によって、ロシアに巨大な力を持っています。私たちの考えを主張する好機でした。それらの意味は重要でした。でもそれらが演説で示されていたでしょうか。どんな場合でもフランスは、隣国との戦争行為を待っていると言っていたでしょうか。いいえ、違います。全く形式上の主張に止まっていた。そして特に現実として、私たちは最も危険な解釈となり得る軍隊の編成方法に変えたのです。脅威による紛争においては、行動が言葉以上に重要です。急進的政治に合致させる明白な防衛形態が、最も明らかな言語でしたし、まさに調停者ならそうでなければなりません。如何なる意味においても一人ひとりにははっきりと見て、押し進めることなのです。

百四十四 最も強い人々の虐殺 (LE MASACRE DES MEILLEURS)

最も強い人々の虐殺を、私は強調して言います。この戦争の結果を生の儘考えて下さい。そして勝利のことも同様に考えて下さい。名誉は別にして、最も尊敬に値するのは死者たちです。あらゆる高潔さが大地に飲まれます。何故なら戦争を叫び、押し進めるのは屢々虚栄心であるからです。しかし戦火の前に立つのが本当の力です。肉体と倫理は一体となり、先頭を進みます。そして年齢ぎりぎり子供たちがその様になるのも、その前でさえあります。この恐ろしい現代の戦争においては最早、古き時代の戦いの選択はありませんが、力強く勇敢で自分を抑制出来る自由な人間は、屢々そこに戻れる好機がありました。従って『イリアス』において、最も力が強く勇敢な者たちが不敗で、少なくとも誰よりも全て長く続いて行くのは自然であるように思われます。ユリシーズは祖国に戻ります。しかし現代の戦争においては、戦火の元で陣地を奪い取るのが重要である時、最も快活で高貴で堂々とした人々は、確実に死へ向かって歩いています。彼は道を開きますが、勝利を前にして倒れます。というのも勇氣は、弾丸や砲弾に対して何も出来ないからです。戦争は最早英雄を生みませんし、英雄たちの虐殺を生みます。平和を守るに相応しいもののために戦争が行われますが、平和が起こる時には最も相応しいものはもう何もありません。ナポレオン帝政の戦争を終わらせる平和を思い出して下さい。そして直近の平和でさえもアルザスとロレーヌの二つの地方は酷い目に遭いました。それは国民にとってやるせないものでしたが、十分に戦った国民はそうではありません。決して人のせいにしないようにしましょう。善良な子供たちが死んだ時も、何時でもこの偽りの危険な神話に陥らないようにしましょう。弱くなった者、逃げた者、思い切って行えない者全ての人々は、結局のところ平和について考えます。彼らには平和がありますが、それは他の人々によって獲得したものです。

勝者とか敗者とかになってから後の国民には、真に高貴で崇高な血が流れている人がおりません。救助者や積極的に活動する人や犠牲的精神の寛大な人がおりません。慎重で計算高く蓄財家ばかりです。債権者や悪賢い人が多くなります。貧しくて下らない性格の人が多くなります。暴君が多くなり、奴隷も多くなります。瀉血すれば最良の血が手に入ります。ぼんやりとした頭脳には恐ろしい皮肉であり、人は決して偽りや裏切りを言いたくはないのですが、彼らには瀉血が時折必要であると言います。更にもっと危険で混乱させる考えは、平和が人々の性格を軟弱にするが、戦争は焼きを入れると説教する時です。平和が術策に長けた者たちや気力の無い者には大変に好都合であると言う時は、戦争が席順を無くして最良にすると言う時でもあります。身分は埒外です。そうなのです。一斉射撃は直ぐに起こるからです。墓標のためには立派な選択です。不公平である、と追悼の演説が読まれますが、彼らの立派な死による全ての教訓は誰のためでしょうか。私はその時、偽善による驚くべき収穫物を恐れます。ある時は大袈裟な話ですが、実際は些細なことです。ある時は日和見主義でよそよそしいのです。要するに戦争における公平さや正義は、全てが確実に敗者になります。その中で笑っているのは不公平です。英雄たちの亡霊が戻って来て、彼らの人生を贖う恥ずかしくない平和に感嘆して欲しいと私は思います。

(一九一四年八月三日)

読者諸氏よ、もしも私の記事が幾らかでも計略の火が付いて発射する照明弾に些かでも似ていたなら、それらの時と場所と状況を告発して下さい。というのも私たちは今、戦場の前線へ移動する最中であり、眺望は何時も近くで変わるからです。昨日(1)、私が〈総動員令の掲示〉を見た時、私は既にもっと簡潔に考えて、大きな一步を踏み出しました。今後は古い知恵に代わって、各々の証拠に沿って思考し、そこに止まって国境を守るのを覚えることが重要です。以上は、偉大なる脱皮です。

幾つもある事柄のうちの一つが、私の専心することです。私は独りきりではなく、それは行為を伴わない熱狂や集団の力による活動を避けることです。殊の外簡単にそれらの力は使われます。でも、完全な哲学が各人に齎されることに私は気付きます。そこには四十年かかって、平和や良識の果実が実ります。私がこのことを言った時、もしも臆病者たちが屢々大声で叫ぶ者たちであったとしても、私が見て結論を下すのは、臆病者がいるのは非常に少ないということです。

その上で哲学をしましょう。平和は人間を軟弱にして、欲望で無能にすると良く言われました。それは表面的で浅薄な見方です。理性的に先ずお互いに言わねばならないことは、私たちが享受している平和や自由というものには、今でも代金を支払うことを知らなければならないことです。従ってそれらがぐらつく時に見捨てることは、非常に容易です。そして結局のところ、公平さと弱さが一緒になることは決してありません。簡単に言えば、地球上に約束されていることは何もありません。私たちには、自分たちを除いて他人の感情から保護されていたと信じることは出来ませんでした。そして人間の立場は、何時も警戒を怠らないことにあります。要するに出来事が起こり得る限り、私があなただを進展させるには無数の理屈がありますが、出来事は多くありません。

しかし自然は唯一の法則によって道を幾つか用意しましたが、もし人がそのことを考えるなら大変に自然です。幸福は、健康が元気で力強くなるように、勇敢にしてくれます。恐れは寧ろ、長く続く不幸が齎す果実です。反対に長い繁栄は、健康な血と力強い筋肉が勇敢にしてくれます。良い人生であればある程、失うことを恐れなくなります。私たちの理性の働きが小さいことを無視して、自然は私たちをそんな風に命じます。そうして多分、国民は個人として存在します。平和は表面的に彼らを弱くさせますが、血球は反対のことを良く語っています。そして、この長く続いた平和というミルクが血液に変わったのですし、多分これからもそうなることでしょう。そのことは国民の中で平和を望む人々が正しく、最も勇氣ある人々であり、この〈共和制〉が〈帝国〉から抜け出たのは、子供から大人が抜け出るようなものであると私に言わせますし、繰り返し言わせます。しかし、それらのことは恐らく、事実として示さなければならない事柄です。そして、もしも証明される時が来たなら、大変に偉大な何らかの平和を救い出すことが出来ます。要するにそれは恐怖の無い正義です。

(一九一四年八月七日)

(八月一日記す)

(1) 昨日とは、八月一日のこと。

フランス北東部のメス上空を飛ぶ飛行士たちの勇気は(1)、古代の最も美しい行為を超えていた、と或る人が言いました。何故、そう判断したのでしょうか。古代ローマの将軍レグルスのような人は、苦痛に少しも強い訳ではなく、平静でもありませんでした。現代の人間にこの力強さが可能である限りは、語ることや他に言い足すのを理解するのはより重要です。大きな進歩は、彼らの精神が宿命論から自由になることにある、と私には見えます。それらの精神は、抵抗によって昔の英雄たちに匹敵することを行います。彼らは行動によって上を行っており、彼らの周りには自由がより大きく広がっています。

運転全開の時に止まるエンジンは、古代の人間に代わるもので、神々の印のようなものでした。そこから恐怖が滑り込んで来ました。そして恐らく、恐怖という恐怖は宗教的なものであると言わねばなりません。古代の英雄が、自分の運命が書かれているのを見て信じた瞬間にそれはやって来ました。その時は逃げ出すか、絶望的に興奮して身を投じます。あるいは強固に人見知りして待ちながら、身を固くしておりました。彼の中には、粉々になって打ち破られたものと全く同じ何かがありました。高度な判断力は雷に打たれて即死したようになりました。しかし現代の英雄である飛行士たちには、同じものを私は何も見ませんでした。悪運は機械的な出来事ではなく、それと分かることであり、予期されたことでしかありません。直ぐに他の方法を取り、目的を見失うことはありません。彼は操作して飛行し、ゆっくりと降下し、狙います。この期待は無敵です。敵の上に力強く飛びかかります。行動は、行動していることを止めません。エンジンが再びかかります。彼は、敵よりももっと強い勝者となって、やりたいようにやって戻って来ます。

砲兵も同じ種類の行動を取ります。技術者も同様に活動的です。この種の人間は、怒りの感情よりも自分の判断を信用しています。そして、一種の激しく揺れる乱れた勇気に勝った時、彼は如何なる宗教的な恐怖も超えています。ところで、この宗教的な恐怖は敗走させられていました。それは勇気のように伝染します。軍神は不敗の原因となり、罰し、試練を与え、報いました。モロッコ人のような人々は、或る種の勇気を誰にも譲らず、恐らく宿命論者の思想によって支配され、奇妙な力として好戦的な熱狂に身を委ねています。そこから突然の変化があり、降伏があり、反乱があります。何故なら彼らは、余りに狂信的活動を当てにしているからであり、理由を知らなくても従うからです。彼らの戦争は、上からの奇跡の連続です。太陽や雨や雷鳴を受入れるように、勇気と逃走を受入れます。この種の勇気は、既に想像力によるものです。しかし困難で巧妙な行動が、これらの無駄で意味の無い考えを一掃します。一人ひとり、行うことが出来ることを行い、エンジンや照準や弾薬筒へ定められた注意を向けます。そのことの予言者であったデカルトは、私たちが自由な意志を持つことの確信を〈高潔〉と呼んでいます。情熱の感情に残されているものは全て追払い、生の儘の世界を理解して下さい。

(一九一四年八月二日)

(1) メスの要塞は、一八七一年にドイツに併合されたロレーヌ地方の領地内にあった。

私たちの判断は、樹木の天辺のように、ほんの僅かな微風にも揺れます。そして大きな間違いや結末は、如何なる地位であろうと、自尊心とか激しい怒りを十分に覚えるとか、それらに目覚める必要があると信じるためのものでもあります。理工科学校生は、作戦と長所と大砲によるあらゆる方法で戦争に導き、私たちの心を何時も惹きつけようとしています。発破が行われる鉱山の技師と全く良く似ています。必要性と利便性の思想が良いものとして頭の中は一杯です。そして残りの肉体は、そうあらねばならない頭を支えるためのものでしかありません。憎しみがなければ強く叩けない、と考えるのは滑稽なことです。そして行動しない儘でいる者たちにとって、目標もなく現在の怒りに身を委ねることは、既に平凡な慰めです。子供たちにとっての良き平和への希望は、最高に価値あるものです。肉体的に考察される悲しい情熱、憎悪、怒り、絶望は全てが痙攣によって擦り切れて弱くなります。一人ひとり自分自身の中に、喜びや健康という普通の泉を探しますが、大変に困難なことです。それは厳しくて厳格な義務なのです。

同様の理由から、一人ひとりが一種の情熱的暴君を自分の裡に考えることも良いことではありません。というのも国家は何時も市民に似ているからです。征服したり、取り戻したり、支配する思想は常に大変強いものになります。そして、何時もそれを手にしていた者たちとしてはそれを守りますが、それは別人の強さです。そして強さは全て利用されます。しかし、戦争に反対する方法として、この戦争を受入れることが出来る者たちとしては、この健全な見方を一瞬たりとも失いません。つまり彼らが復讐や正義という様相を呈する情熱を、一瞬たりとも自分自身にその力を与えないことです。武装された私たちの正義は、揺れ動くこれらの関係を支配しなければならず、それらの関係は勝者から憎悪の敗者へ移行し、敗者から思い上がった暴君の勝者へ移行します。というのも、その思想の道程はそれと分かるので、如何なる問題も前面に出ないからです。一人ひとりの言葉は上の空です。両方を支配しながら高所からでないとは出られません。一つ一つの戦闘は、判断力の機能を高めます。何故ならフランス共和国は今、一人ひとりにかかっているからです。嘗てない程、微妙な点というものが長く失敗を齎し、国家は市民に似て来ます。もしも各国の市民が自らの精神と高潔さを持っていたなら、ロシアは民族のことを語り、イギリスは権力のことを考え、そして我が国フランスは人類と正義と権利のことを考えていました。本来それらは家庭の神々です。そしてベルギーの英雄たちは、そこからフランス人になります。その様にして私たちの祖国は、条約によるどころか武力で広がって行きます。この解放精神は既に、我が国の宣言に表されてきました。もしも一人ひとりが何時も変わる事のないメートルのような単位で、情熱による判断を修正しながら自分自身にそれを持ち続けたなら、無垢で純粋な儘でいることでしょう。そして以上は午前の間中に書いたことですが、屢々余りに悪夢でも一杯になります。

(一九一四年八月二三日)

(志願兵誓約の日)

理論から実践へ移りましょう。新聞は毎日、老人や子供や女性たちの殺戮を報じています。その点について即座に報道しながら、ジャーナリストたちは野蛮な国民を大地に抹殺しなければならないと結論を下しています。私には確かに無益であると思う思想です。有害でさえあります。いずれにせよ間違った思想であり、決して正しくないものです。

戦争は恐ろしいものであり、荒れ狂った力を持った人を考察するのに慣れなければなりません。ここでの人間の生活は、一つの手段です。如何なる隊長も、敵に占領された村を砲弾で浴びせることに躊躇しません。そして砲弾は、戦闘員であろうとなかろうと区別しません。穴の開いた道に、敵の負傷者である者たちもフランスの負傷者たちもあり、大砲は攻勢に出るために急いでいて、殆どそこを見ずに踏みつけて行きます。同様に、突撃する騎兵も負傷者たちを見ないで踏みつけて行きます。それが戦争です。戦争の管理運営は、必要な期間がある限りしか使用しないと云えば十分です。

市民という人々に対する用心や直接的な制裁や裁判抜き処刑も、必要性に属しています。ここでは誰が判断するのでしょうか。戦闘に動き回る人々です。彼らは直ぐに恐れて信じます。その判断は武器を持って行います。この事実から戦争に参加する者は、もしも特に抵抗が激しいものであったならば、節度や正義には何にも期待しません。

残酷な行為や拷問に関してですが、先ず一番目には、幾人かの人の行為でその国民を判断するのは止めましょう。二番目には、戦争をしている人に倣って平和の中にいる人を判断するのは止めましょう。自由や権利に値しないと結論を下すのではなくて、軍隊の絶対権力に従って訓練されたり興奮したりする若者も又、判断するのは止めましょう。どんな犯罪でも、性格が原因で行われるというよりも、寧ろ環境や状況の成り行きによって行われるのです。戦争は、その人の性質や教育、一人ひとりの理屈に従って、多少なりとも早く陥る一種の狂気にも、それなりの正義を与えます。サーベルを滅多に抜かない人に栄光あれ。人々に哀れみを。

この言葉はあなた方を苛立たせます。しかし、情熱という感情の動きに流されないで下さい。あなた方の行為は、判断力よりも価値があることを考えて下さい。もしも、あなた方に敵の捕虜を守る機会が与えられたなら、あなた方は虐殺することも空腹で餓死させることも考えません。何故、あなた方の判断力は、行為よりも必要とされないのでしょうか。あなた方は情熱に流されないで下さい。その訓練をして下さい。熱気に抵抗するのと同じ力が、恐怖にも抵抗します。そして、この力が私たちの力です。この度の戦争(1)は平和のためであり、ドイツの共和制のためであり、彼らと一緒に私たちの友情も長続きします。そうでなければいけません。この戦争は、その他のことでは終わりに出来ませんし、さもないと又他の戦争が続いて起こるでしょう。公平で穏やかな人間であるあなた方の英雄主義は、無駄でしょうか。この考えは慰めではありません。私たちが参戦しているこの戦争は、古代の戦争ではありません。戦争が原因の戦争です。この考えを忘れないで置きましょう。心象を排除しましょう。困難ですが、そうして下さい。しかし、私たちはもっと困難な任務を経験している英雄なのです。

(一九一四年八月二四日)

(1) ドイツがフランスに宣戦布告したのは、一九一四年八月三日であった。

政府の通知文書は、未だ私が望んでいるものではありません。余り綿密に調べていません。余りに用心のし過ぎです。説明したり計画したりするのに、余りに心配のし過ぎです。彼らは欺きたくないのでしょう。幸いなことに私たちは最早そこにおりません。しかし、これらのことを書く人々は、信望ある人間のように自分自身を欺くのに専念します。多くの人間が氾濫してドイツがベルギーを占領した時には、再び失敗するしかないと書いていました。

同様に、正式な作戦広報においては、私たちが占領している陣地は何時も最重要地点に違わず、逆に放棄しなければならない陣地は全く役に立たないものに違いありません。でもこの言い方は見当違いです。事実とは現実のものです。間違った判断で大きくなる希望は子供じみています。成人男子の希望は、一回きりの失敗では折れませんし、十回失敗しても、そして決して成功しなくても諦めません。というのも事実は逆に、今の人々も昔の人々も武器に運命が支配されているからです。しかし本来の意志は運命を超えています。何ものも取り壊せません。その美德は、敵が一人ひとりの意志をまさに砕こうとする暴力の行使とその繰り返しを苦難の真っ只中で期待されている兵士の簡潔さにあるからです。というのも、勝利に貢献するものがその中にあるからです。そして最も劣った兵士がスパルタ王のレオニダスと等しくなければならず、最後の息の根を止めるまで、砲弾や弾丸に期待しなければならない以上、私には大義名分の建て前に同じ美德を期待する権利が十分にあります。

何故ならドイツ軍が背後に回ると思っている兵士は、皆が心配であるからです。でもこの種の幻想は直ちに吹き飛ばされます。根拠の無い想像力に勇気を結びつける必要は少しもありません。反対に、困難で危険な本当の見方によって、意志そのものの強さに身を隠すことです。勝利の泉へ遡ることは、禁欲的な意志になります。弁護士の理屈で失敗を改めたいと思う精神の人は、完全に失敗の精神です。

しかし、それと同じ行為をしない人は、恐らく多くが許されなければなりません。辛い立場であり、殆ど耐えられないものです。その時、希望は最早射手の大砲に止まっています。あるいは力を越えて十キロメートル先へ飛んで行きます。希望は、怪物の姿になって余りに早く行きます。それらの怪物を想像上の戦いで改めて守り、そこの集団の中央に論拠になるものが集められます。スタンダールが語るように、想像力で逆になることには注意して下さい。しかしながら、判断力の動揺を抑制して抑えなければなりません。攻撃力や資源や避けられない苦難という実際の観念や、最終的な勝利を形にしなければなりません。それは何時も、人々が創るものが未来であるという思想に基づいており、やって来て現れるものではありません。

(一九一四年八月二八日)

勇気も訓練次第であり、状況次第でもあります。絶対的なことを言うなら、それは臆病者には決してないものです。そして、あらゆる戦争において引き起こされたことですが、善良な人々の集団は戦争から逃げたということです。キプリングは、情報の一つとしてアフガニスタン人の大きな刀に遭遇した歩兵部隊から、倫理的な成長を学んで身に付けました。彼らの最初の動きは、無秩序でも引き下がるということです。しかし彼らは立ち止まり、熟考して戻り、恐ろしくなります。パニックに襲われて、藁が風に飛ぶように運ばれて来る人間を、如何に侮辱するのでしょうか。隊長たちは罰します。それで十分です。

如何なる時にも勇気ある人は譲歩することが出来るのを、私は良く知っています。それは行為そのものが、立ち止まっている時です。その時、情熱は体の中を駆け巡っています。あらゆる倫理的力の支点になるものは、限定されていて明らかに有益な多くの行為です。そして私にとっては、執拗で創意工夫に富んで敵をやっつけることに気を遣う防御という思想を、一般民衆に帰して普及させなければならなかったと思います。勇気の基本となるものは多分、何時も小さなことの積み重なりに与えられる信頼にあります。よって、ノコギリで鋼鉄の上に挑む二人の労働者を見ると、あなたは彼らの我慢強さにびっくりしますが、翌日になると既にそのレールはしかるべき所にあります。その人々は、鉄はノコギリで挽くしかないことを分かっています。その人々は、鉄はノコギリで挽くしかないことを分かっています。兵隊が学ばなければならないことは、武器を使用することだけです。壊したり分散させようとするのは少なく、面と向かって磨いて眼の前で働きながら、各人の発射が齎すのは一つの勝利であるという考えを持っており、各人の手に帰する財産を無効にすることは出来ません。

理性がなければなりません。深く成長し形成する者は、集団の背後で他者や更にその他の者を理解させる者であり、人が壊すようなもの、切り捨てるもの、包み隠してぼやけさせるものを期待する必要はありません。それは斧であちらこちらを切り倒して森の中へ身を投げることです。しかし、その樵たちは削り屑だらけになり、木から木へ切り倒して、全く別のものを生んで行きます。

私が気付いているのは、大砲の連続発射が確実に行われるには、その前に常に歩兵隊による援助があり、系統立って組織的に行われる恐怖の砲弾運びがあります。興奮には反対する産業です。私はその雰囲気の中で推論するのですが、確からしいことは私が巨大なこの殺人機械の中で直ぐに見たり書いたりすることです。その時私は、そこから遠く離れずに、より良いことを考えるのでしよう。そして予見出来ることは、軍隊生活の義務はこれらのプロポを書く時間を与えないのでしようし、既に今も狭い場所に押し込められて、行動は制限され、自由な独創性というものはありません。それというのも、必要性が私たちの全てであり、あらゆるやり方で自由は制限されていますし、それと同時に何時もこの自由を手に入れることが要求されてもいるのです。思考することとは、今はダビデが巨人を倒した石投げ器なのです。

(一九一四年八月二九日)

(ジョワニーへの配属発令日である八月二五日記す)

一人ひとりが戦士です。そうです、最も弱い女性も戦士です。行為によって戦士になるのではありません。不撓不屈の精神によってなるのです。敵は急いでいます。フランス北部のノール県地方を攻撃した後、敵は中心部にまで大砲の音を聞かせたがっています。それは戦争を終わらせるためであって、確かに私たちの家に這入って来て皆殺しにするためではないのかもしれませんが、敵の影響力によって恐怖が刻印されます。

ところで恐怖は、分子の中の一つの要素のようなものです。各々の分子は影響し合っています。もしも自己を放棄して戦うのを止めたならば、恐怖はばら撒かれて消えることはないでしょう。敢えて言うなら、最も弱い者はこの特別な属性を自分の心や腹の中に、一寸した共通の恐怖として保持します。確かにコレラとかペストに罹れば、誰も一人ひとりが一般的に健康に対して責任を持つようになるが如きです。そして肉体的に予防して、コレラやペストから身を守ります。奇妙なことですが人間たちは、病気を征服する能力よりも、情熱を征服する能力の方がまだゆっくりしているのを学びました。そして、それは病気を征服する能力よりも余り普及していない思想であり、動作や態度や主張や議論によって導かれる善や、想像力という悪い遊びに対する闘いによって、信じられない位容易に激しい感情に勝利することになるのです。しかし、もしも情動に自分の身を任せて修正することなく、管理することもなければ、これ以上に危険なものは何もありません。

人間にとっての最も古い思想の一つは、私たちの神秘的な源泉となって来るのは情動の感情であるのです。その思想は十分に出来るものです。それというのも私の情動は、その原因を認識する前に、私の体全体に侵入し始めるからです。何故、ある時には決心がつき、他の時には躊躇するのでしょうか。私の裡で演じられているこの力、それが自己であったり、自己でなかったりするのです。病気は自己からやって来ますが、私は何もすることが出来ません。精神の病気とは、魔法の力を信じさせたものです。そして誰もが自分の悲しみや絶望から自由になるために、何かを哀願することから始めますが、屢々それは自分と似たものです。この体験から他人の気分というものには私たちに多くのものを生んで行くこととなります。そして女予言者の巫女ではなくて、本当の友人を探すなら、そのことは少なくとも決して間違いではありません。そしてあなたの友人は、あなた以上のことが出来るのであり、あなたはあなた自身以外の方が出来るのです。あなたの友人はあなたの代わりを成し、あなたは友人の代わりにそのことを成すことが出来るのです。それ故に、先ずは私たちの判断と思考に目覚めていきましょう。そして、それ以外の力を誰も探さないことです。

希望は、決して私たちの外部になく、手に届く処にあります。それというのも、もしもその希望が現実のものになったなら、あるべき希望はその瞬間に無くなって仕舞うのではありませんか。もしも人がそのことを信じるなら、いんちきの取引です。希望とは意志のものであり、伸ばした腕で意志によって齎されます。期待する人々の一人ひとりとはそれ故に、軍隊のような彼らの力を全て結集させるのです。もしも統治者たちが正しいとしても、決して関係を持ったり見てはな

りません。彼らを支え、支持することです。彼らの力は私たち全員のもので。 (完)

(一九一四年九月一日)

(軍用列車の中で八月二七日記す)

一ノルマンディー人のプロポ V (完)

【2014年11月号】

<http://p.booklog.jp/book/89163>

著者 : アラン (翻訳 : 高村昌憲)

翻訳者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/89163>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/89163>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ